

Ⅲ 研究事業

東洋文庫は、アジア諸地域の歴史と文化の発展に関する基礎資料を80年余にわたって組織的かつ継続的に収集してきた（斯波義信「財団法人東洋文庫の80年」財団法人東洋文庫編集・発行『東洋文庫80年史Ⅰ－沿革と名品－』平成19年、5-36頁）。研究事業の主たる目的は、これらの資料を収集・整理して、内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料にもとづく広範なアジア研究を推進して、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することに置かれている。アジアの全域を対象にして基礎資料を体系的に収集・整理し、それにもとづく総合的な基礎研究の推進は、アジア研究の長い伝統を有する東洋文庫以外にはなしえない。

東洋文庫は、この事業をさらに効果的に推進するために、平成15年度から、(1) アジア研究の組織的な編成と若手研究員の積極的な採用、(2) 現代アジアの重要課題に関する総合的研究への取り組み、(3) 欧文の成果発信を拡充することによる国際的な活動の強化、および(4) 資料・研究情報の公開と共同利用を促進すべく、研究部と図書部を一丸とした電子情報システムの構築に着手した。この改革を機に、研究分野は<超域アジア研究>と<アジア諸地域に関する歴史・文化研究>（以下、<歴史・文化研究>）とから構成されることになり、前者は一次資料にもとづく現代アジアの学際的な実証研究、後者は各ディシプリンを生かした歴史・文化的な基礎研究を主要な課題としている。

1. 調査研究

A. 超域アジア研究

これまで東洋文庫における調査研究は、超域アジア部門と歴史文化分野に分たれ、そのそれぞれがイスラーム圏域、中国圏域に、またアジア各地域研究部門へと専門化されてきたが、今年度から3年間に亘り、各年度に主要な検討地域に焦点を当て、アジアの地域間交流や地域を跨いだ共通の課題に複数の研究班で取り組む体制と運用を試みた。従来からの個別専門研究の長期的な蓄積に基づき、現在のアジアの変動に見られるように、変動の原因とそ

の範囲がアジアの内部においてのみならずグローバルに影響し合っているという状況下にあっては、歴史としての現代という視覚からの研究が求められると考える。これらの目的から総合アジア圏域研究への取り組みを強化した。

“アラブの春”といわれるイスラーム圏の変動は、権威主義的政治体制が、一見安定的に見えても、その内実ではグローバル化する社会関係の変動に対応することが出来ていないことを露呈した (F. Gregory Gause III, “Why Middle East Studies Missed the Arab Spring: The Myth of Authoritarian Stability,” *Foreign Affairs*, July/August 2011, pp. 81-90)。また、中国圏においても、これらの“アラブの春”に内在する諸問題に対応する取り組みが急がれており、経済発展の次に来る社会生活の充実が緊急の課題であることを示している。その状況の中で、より歴史的に長期の視点から現在と将来を検討すべきという議論がなされ、グローバル化が進む中で、中国研究は如何にあるべきか、また、アジアの歴史的な流れの中で現在をどのように位置付け、今後の方向を考えるか、という長期視野に関する課題が一気に浮上している (Yan Xuetong, *Ancient Chinese Thought, Modern Chinese Power*, Princeton University Press, 2011)。この動きは、1) 全アジアの視野に立ち、2) 世界的な動きの中でアジアを位置づけつつ、さらに、3) どのように個別地域のうごきと連動させて検討するか、という3層にわたる研究課題を結びつけることが求められる。この新たな研究領域は、アジア社会の長期変動に関する主題であり、これまで長期にわたる資料収集と地域研究に基づいたアジア研究を進めてきた東洋文庫の研究班すべてを連携する総合アジア圏域研究において初めて対応が可能である。

この課題に応えるため、今年度からは、「一つの圏域からアジアのすべての圏域について考える、また、アジアのすべての圏域から一つの圏域について考える」という相互にフィードバックを可能とする研究体制と研究方法を新たに追及し、具体的には、「超域アジア研究部門」のなかに、「総合アジア圏域研究班」を設置し、新たな取り組みを開始した。「総合アジア圏域研究班」の目的と役割は以下のとおりである。1) アジア規模の問題群を設定し、東洋文庫のすべての研究グループを有機的に結び付けて分析検討すること、2) イスラーム圏と中国圏というこれまでの2つの超域研究のテーマを相互に関連させながら、かつまたそれぞれが独自に持つアジア規模の問題への広がりを検討する。さらに、3) 東洋文庫が進めてきたアジア各地域に関する歴史・文化研究ならびに資料研究を多様に組み合わせ、総合アジア圏域研究の活動に結び付けていく。併せて国際的な研究交流や共同研究を進め、そ

これらの検討成果を継続的にワーキングペーパーや欧文電子ジャーナルなどを活用して広く発信する試みである。

以上の活動を推進するため、書誌学的にも通暁した人材を育成し、アジア資料学の構築を目指す東洋文庫独自の若手人材育成を課題とした。

・中国圏とイスラーム圏の現在

1980年代以降のアジア諸地域は、大きな変動を経験するとともに、経済的な急成長をとげたことにより、21世紀の世界情勢の展望にとってアジアの占める位置と役割は著しく高まりつつある。中国は1979年の改革・開放後に急速な変容と発展を遂げ、今や中国情勢は、国内問題にとどまらず、隣接アジアを包摂した課題として総合的・多面的な実証研究を不可避としている。

また、イスラームのグローバル化とその先鋭化も近年の著しい現象であり、いわゆる“アラブの春”という動きは、世界的に大きな影響を与えている。現代世界の理解のためには、中東や中央アジア、中国・東南アジアなどのイスラームの現実を基礎データにもとづいて多面的に解析することが必要である。

以上のような状況をふまえ、現代のアジア圏域ならびに中国圏域およびイスラーム圏域に関するアジア規模の研究を組織し、これを政治学・経済学・宗教学・歴史学などを融合した学際型、内外研究機関横断的な共同研究として実施する。これらの現代研究は、基礎資料の収集と解析にもとづき、長期的な視野の下に息の長い実証研究を行うことが必要であるが、2012年度は中央アジアをめぐるアジア規模のまたグローバル規模の検討をおこなうべく東洋文庫の3研究グループによる連続研究セミナーをおこない、それらを集約する国際シンポジウムを開催した。

〈超域アジア研究部門〉

(1) 総合アジア圏域研究班

「総合アジア圏域研究」

総 括 斯波義信[○]
濱下武志[○]、田仲一成[○]、平野健一郎[○]

現代中国	毛里和子、中兼和津次、平野健一郎*、斯波義信*
現代イスラーム	八尾師誠、池田美佐子、粕谷 元、湯浅 剛
前近代中国	太田幸男、斯波義信、山本英史、清水信行
近代中国	本庄比佐子
東北アジア	六反田豊、松村 潤、石橋崇雄
日 本	今西裕一郎
中央アジア	梅村 坦、小松久男、土肥義和
チベット	吉水千鶴子
インド	辛島 昇
東南アジア	弘末雅士
西アジア	三浦 徹
東アジア資料	斯波義信*

(◎は専従者、*は重複を示す。以下同じ)

基本的な研究方法は、年度ごとに重点地域を定め、それをアジア規模の視野から多角的に検討するとともに、周縁諸地域との地域連関や相互影響関係を検討する。範囲は、基礎資料研究、現地研究、主題研究などに跨り、多分野間のまた国際間の比較研究を行う。また、資料、検討過程並びに研究成果は、英文電子情報としてオンラインにより発信する。このような総合的アジア研究は、アジア諸地域における資料収集と地域研究の蓄積を持ち、内外の研究連携を進めてきた東洋文庫においてのみ可能であると考えている。

東洋文庫のすべての研究班の参加によって行われる重点研究としてこの「総合アジア圏域研究」があるが、基本的な検討項目は、各年度において選択した1つの地域のアジアの地域連関における位置と役割、地域間移民ネットワーク、ディアスポラ、トランスナショナル問題を検討する。ワークショップを開催して議論を重ね、現地調査・資料調査によって現代の諸問題を歴史的背景を含め提示する。これらの討論過程を、ワーキングペーパーや電子ジャーナルにおいて発信し、さらに議論を広げていくことを目指す。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫所蔵の貴重書を用いた講習会「アジア資料学研究シリーズ」を開始した。今年度は、石塚晴通研究員を講師とし、「東洋の Codicology

“漢字文献”]として3日間のセミナーを開催した。内外の書誌学研究者、研究資料館らの応募があり、このうち先着で20名の参加を得た。

- b) 中央アジア研究班の3グループがコーディネーターとなり、中央アジア圏域シンポジウム“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere”を開催した。シンポジウムは2日間行われ、のべ138名の参加者を得て、活発な討論が行われた。
- c) 若手研究者の国際的な研究成果発信を支援するため、国立シンガポール大学出版のポール・クラトスカ氏を招き、セミナー“Scholarly Publishing in English: What Editors Expect”を開催した。東洋文庫に籍を置く若手研究員および日本学術振興会特別研究員が参加し、クラトスカ氏より英文研究論文の作成について指導をうけた。

(2) 現代中国研究班

「現代中国の総合的研究 (2)」

総括	毛里和子
政治	毛里和子*、天児 慧、青山瑠妙、興梠一郎、唐 亮、平野 聡
経済	中兼和津次、加藤弘之、巖 善平、丸川知雄、梶谷 懐、寶劔久俊、唐 成
国際関係・文化	平野健一郎 [◎] 、濱下武志 [◎] 、田中明彦、川島 真、貴志俊彦、黄 東蘭、砂山幸雄、高田幸男、古田和子、村田雄二郎、土田哲夫
資料	斯波義信、矢吹 晋、貴志俊彦、新村容子、城山智子、村上 衛

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制（資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成）を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央研究

院や中国社会科学院、ハーヴァード燕京研究所との学术交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。

[研究実施概要]

- a) 資料グループは、東洋文庫の英文定期刊行誌 Modern Asian Studies Review の第4号において、東洋文庫が所蔵する G.E. Morrison のコレクション、なかなづくパンフレット資料を活用した、18,19世紀、20世紀初頭の中国経済、アジア貿易に関する4本の英文論考を公刊した。またパンフレット資料1点ごとについて、summary and notes を施す作業を進捗させ、順次インターネット上で公開している。
- b) 政治グループは、政治・経済・行政・社会・法律各分野の専門家で陳情（信訪）に関心を持つ中堅・若い研究者をメンバーとする「総合研究－陳情」研究会第一期を隔月一回開催し、その成果を毛里和子・松戸庸子編『陳情 中国社会の底辺から』（東方書店、2013年）として刊行した。引き続き第二期の研究活動に入っており、中国から研究者1名を招請して、ワークショップを開いた。
- c) 経済グループは、「歴史的視野から見た現代中国経済」研究の第2部として、「毛沢東時代の経済制度・政策の再検討」を推し進めてきた。中国から3名、シンガポールから1人の研究者を招聘し、また国内の近現代中国経済研究者を交えてシンポジウムを開催し、多角的視野から毛沢東時代の経済制度ならびに政策の現代的意味を議論した。引き続きこの作業を継続し、来年度には内外の研究者の研究成果を集めて、出版する計画である。
- d) 国際関係・文化グループは、全体的な研究テーマ「戦後中国の国際関係と社会・文化変容」の下、若手の研究報告を中心に年間4回の研究会を開催するとともに、汪兆銘政権大使館文書の目録作成を進めた。
- e) 政治グループ、経済グループ、国際関係・文化グループとも、図書資料の購入に関しては、東洋文庫の現代中国研究資料センターと提携して、系統的な収書を行う。

(3) 現代イスラーム研究班

「現代イスラームの超域的基礎研究

－議会主義の展開と立憲体制に関する一次資料の収集と比較分析研究－」

総括	八尾師誠
アラブ	池田美佐子、長沢栄治、小杉 泰、関本照夫、松本 弘、鈴木恵美
イラン	八尾師誠*、松永泰行、黒田 卓、鈴木 均
トルコ	粕谷 元、小松久男、設楽國廣、江川ひかり、大河原知樹、秋葉 淳、澤江史子
中央アジア	湯浅 剛、小松久男*、宇山智彦

世界の近現代イスラーム研究において、これまでほとんど用いられることなかった中東諸国の議会文書（アラビア語、ペルシア語、トルコ語）を収集・整理・分析し、それぞれの地域（国家）に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。2009年度からは、新たに中央アジア諸国を比較の対象に加え、基本資料の収集と整理・分析を行う。これによって中東・中央アジアなどのイスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を一次資料にもとづいて総合的に考察する。他方、イスラーム関係資料の収集と整理、データベース化を推進し、日本における資料センターとしての充実をはかる。

〔研究実施概要〕

現代イスラーム研究班の活動は、資料の性格に対応してアラブ、イラン、トルコ、中央アジアの4グループに分かれて実行される。アラブ、イラン、トルコグループの研究は、第1期（2003年-2008年）の実績を踏まえて実施されたが、2012年度における各グループの研究実施概要は以下の通りである。

- a) アラブグループ：2011年度に引き続き A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt（東洋文庫、2007）を利用して、議会文書の解説・分析を進めた。
- b) イラングループ：2005年度に作成した議会文書のインデクス(CD-ROM版)を利用して、議会文書の分析を進めるほか、『1945～46年のモクリー地

域におけるクルディスタン民主化運動の研究』をクルド語と英文で出版した。

- c) トルコグループ：2006年度刊行の論文集『トルコにおける議会制の展開』を基礎に、関係資料の収集と議会文書の解析を進めた。
- d) 中央アジアグループ：研究の4年度目に当たり、引き続き関係資料の収集と整理を行った。年度末には合同研究会を開いて用語・訳語の検討を行うと共に、4分野間の比較分析を行う。なお、中国・日本の議会制・立憲制の専門家を招いて比較のための報告を頂いた。

B. アジア諸地域研究

歴史・文化研究は、アジア諸地域の基礎的な資料を収集し、それらを解説・研究・分類編集・出版することによって、アジア諸地域・諸民族・諸文化の歴史・文化に関する理解を深める役割を担う。これらの基礎的な研究は、総合的なアジア圏域研究の推進に資するものであり、東洋文庫における研究蓄積が国際的なアジア研究を支える基礎になっている。総合アジア圏域研究は、アジア規模の視野から、歴史・文化研究を位置づけることを課題としている。

〈東アジア研究部門〉

(1) 前近代中国研究班

①「古代地域史研究－『水経注』の分析から－(2)」

総括 太田幸男
松丸道雄、藤田 忠、飯尾秀幸、靱山 明、塩沢裕仁、
多田狷介、窪添慶文、池田雄一、金子修一、川合 安

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』（原典6世紀、中国最古の地理書）とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的方法による研究に挑んでいる。また流域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討することで、歴史的自然環境・社会的実態を具体

的に理解し、流域の地域社会の構造の変化を明らかにしていく。刊行を予定している『水経注疏訳注』渭水篇下巻及び洛水・伊水篇訳注もこれらの成果を反映させたい。渭水下流域及び洛水・伊水流域は「黄河文明」の中心地である。ここを「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究の新たな展開となる研究を目指している。

〔研究実施概要〕

- a) 陳橋驛復校『水経注疏』（江蘇古籍出版社刊）をテキストとし、洛水・伊水篇（巻15）の講読を隔週の研究会において実施した。洛水は陝西省東南部に発して東北流して河南省洛陽を経て、偃師県において河南省内を東北流してきた伊水を合わせた後、同省鞏県東北の洛口において黄河に入る。2012年度は源流から東周洛邑に至る流域までを検討し、すでに公刊された渭水篇訳注上・下巻に続いて、洛水・伊水篇訳注の刊行をめざしている。
- b) 『水経注』洛水・伊水篇訳注を刊行するため、洛水・伊水流域の地誌的記述及び考古学的調査・発掘報告の収集を実施した。またランドサット衛星地図などの情報を利用し、洛水流域の古代遺跡の状況を歴史地理学的に把握した。
- c) 2013年度に『張家山漢簡論文集』を刊行するため、隔週で研究会を実施し、準備を行った。また2012年12月23日より27日まで、武漢および荊州に出張し、張家山漢簡および関連遺跡の現地調査、荊州博物館での研究交流を行った。

②「中国社会経済史用語解集成の電子辞典化」

総 括 斯波義信^{◎*}

梅原 郁、千葉 熈、渡辺紘良、妹尾達彦、長谷川誠夫

本グループがこれまでに作成・公刊した『宋史食貨志訳注（一）～（六）』（東洋文庫刊、1960年～2006年）、および『宋会要輯稿・食貨篇・社会経済用語集成』（東洋文庫刊・2008年）における訳注および用語の収集の成果をベースとして、整理と増補を加え、広範囲かつ多方面の利用者の便宜に適合するような冊子体およびCD-ROMの用語解説集を作成し、研究活動のいっそうの発展に資するプロジェクトである。

[研究実施概要]

- a) 「前近代中国研究班」の中の「社会経済史用語解作成グループ」は、2012年度に作成出版した『中国社会経済史用語解』について、記載に正誤を施した上で、2013年1月10日、第2刷を増刷刊行した。
- b) 引き続き増補版の作成に着手し、「法制」の範疇を加えて、関連する用語解のデータを収集した。
- c) 「財政」「経済」「社会」の範疇についても増補の作業に入り、関連する用語解のデータを収集した。
- d) 毎月研究会を催し、史料・関連文献の読解・釈語データの収集を行った。
- e) 既刊の『中国社会経済史用語解』収載の釈語を、東洋文庫のホームページを通じて順次公開した。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究（3）」

総括

清水信行

田村晃一、早乙女雅博、飯島武次、妹尾達彦*、井上和人、
小嶋芳孝

本研究班では、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として2004年度に『東アジアの都城と渤海』（全394頁）を、2006年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。しかしその中心となる渤海上京龍泉府址（東京城）出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、一部の遺物の調査・研究を継続実施する。

[研究実施概要]

中国吉林省琿春市所在の八連城（渤海の東京龍原府に疑定されている）に関する発掘報告書の内容を検討し、百濟、新羅の都城に関する最新の情報の収集に努めた。

- a) 上記研究計画遂行のため、2011年12月23日から29日まで、中国東北地方の渤海遺跡出土の資料を実見する調査旅行を実施した。吉林省考古研究所の収蔵庫において、八連城、西古城、六頂山、査里巴、柚樹老河深遺跡出土の遺物を実見した。また、牡丹江市博物館を見学するとともに、渤海鎮の上京龍泉府址を踏査した。
- b) 『西古城』、『渤海上京城』、『六頂山渤海墓葬』の各報告書の内容を検討した。

- c) 2012年8月27日から9月1日まで、中国東北地方渤海遺跡の踏査を行なった。上京城址、興隆寺、三霊屯墓などを踏査し、現在の中国における調査の状況や遺跡の保存状態を確認した。また、牡丹江師範学院において開催された『渤海研究発表会』において、田村研究員は渤海の蓮華文瓦当について、清水信行はロシア沿海州クラスキノ城跡の発掘について発表を行ない、中国側研究者と交流を深めた。さらに、北京の国家博物館の見学を行なった。

④「前近代中国民事法令の変遷」

総括	山本英史
南宋	大澤正昭、青木 敦
元代	鈴木立子
明代	鶴見尚弘
明清代	岸本美緒、濱島敦俊、寺田浩明、西 英昭、高遠拓児

宋代以降の戸婚・田土・錢穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近20年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすくなったことにもよろう。本研究班も過去5年間、この方向で研究活動をしてきた。この5年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてる必要があることに到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析するに適しているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆくが、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると考える。

[研究実施概要]

本年度も昨年度に引き続き、宋代以降の戸婚・田土・錢穀などを扱う「民事」法令を分析し、それらがどのように変遷してきたかを明らかにしてきた。

本研究班は過去5年間、この方向で研究活動をしてきた。そして、この5年間の研究を通して、改めて法令そのものに視点をあてる重要性を再確認し

た。今年度はこのような過去の研究蓄積を踏まえたうえで、新たな研究成果を論文集として公刊する準備を整えた。

- a) 昨年度に引き続き、宋～清の条例の収集に努めた。
- b) 研究班の各自の研究に資する国内外の史料収集活動を継続的に実施した。
- c) 収集した条例の整理、解説を行うのと並行して定期的に研究会を開き、メンバー各自が作成した論文の相互検討を行い、2013 年内に研究成果としての論文集を公刊することをめざした。

(2) 近代中国研究班

〔20 世紀前半日本の中国調査〕

総括	本庄比佐子
経 済	久保 亨、金丸裕一、弁納才一、富澤芳亜、吉澤誠一郎
政 治	内山雅生、松重充浩、田中比呂志
文化・社会	飯島 渉、佐藤仁史、浅田進史、瀧下彩子 [◎]

本研究は、1910 年代から 40 年代前半に日本の諸研究調査機関が中国で実施した調査活動に関する資料収集とその分析を行うもので、その重点は華北におくが、地域的特質を検討するために華中南を含め、日本側および中国側の資料の活用について新たな視点から再整理をはかり、20 世紀前半期の中国社会の全体像を考察する。2011 年度に引き続き、「華北」認識の問題を中心テーマとする。

〔研究実施概要〕

- a) 2011 年度に開催した国際シンポジウム「華北の発見」における報告を基に論文集刊行の準備をおこなった。すなわち各報告者は論文第 1 稿を作成して、それに対して外部の近中班関係者からコメントを聞く原稿検討会を開催し、また班員相互のコメント交換も行って最終稿の準備に入った。
- b) 日本及び中国における資料調査・収集を引き続きおこなった。
- c) 『近代中国研究彙報』第 35 号を刊行した。

(3) 東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究 (2)」

総括 六反田豊
 吉田光男、糟谷憲一、井上和枝、須川英徳、武田幸男、
 森平雅彦、山内弘一、山内民博

当班では2004年度以来、京都大学附属図書館や天理大学附属天理図書館今西文庫をはじめ、日本国内の各機関・個人が所蔵している近世朝鮮の記録類の調査を進めてきた。本課題はそれをさらに継続し、第2次調査をおこなうことにより、解題目録の完成を期すことをめざす。すでに近世朝鮮の古典籍類（いわゆる「朝鮮本」）については総合的な調査が進められ、その全貌がある程度解明されているが、これに対し地方官庁や民間で作成され、「成冊」などと呼ばれる帳簿類をはじめとする各種の記録類については、これまで全体的な調査がなされることがほとんどなかった。2004年度からの第1次調査では、もはや現地では所在が確認されていない資料を発見し、その内容分析をおこなうなどの成果もあげており、第1次調査と今回の第2次調査によって、日本における当該資料類の悉皆的な調査をほぼ達成できるものと見込まれる。

[研究実施概要]

東京大学総合図書館、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所等において、当該機関が所蔵する近世朝鮮の記録類の調査および目録作成作業を実施した。上記調査の結果を整理し、『日本所在近世朝鮮記録類解題Ⅱ』刊行のための準備を進めた。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究 (2)」

総括 松村 潤
 満洲語档案 加藤直人、中見立夫、楠木賢道、細谷良夫、柳澤 明

清代の第一公用語である満洲語は、清初ばかりでなく、清朝一代にわたって用いられた言語である。18世紀の乾隆帝代より、京師に暮らす旗人たちは、

日常語として漢語をもちいるようになっていったが、文章用語としての満洲語は、民国にいたるまで継続して利用された。現在、北京・中国第一歴史檔案館には、約1千万件の文書資料が保存されているが、その半分は、満洲語（または漢語とのいわゆる合璧）によって記されたものである。このことは、清代の文書伝達体系全体において、満洲語の利用が不可欠であったことを示している。とくに入関前（1644年以前）および清初の時期の文書・書籍、ならびに旗人、藩部をはじめとする辺境地方、そして対外関係等の文書において、多くの場合満洲語が用いられている。本研究は、これら満洲語で記された、または場合によっては印刷された清代の文献資料について、清初期を中心として総合的に検討を加えようとするものである。

[研究実施計画]

- a) 清初の「内国史院」関係文献と『鑲紅旗滿州衙門檔案』の研究を実施する。
- b) 『内国史院檔 天聰五年 II』を刊行した。
- c) 『鑲紅旗檔』研究編（TBRL: *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko*）の編集作業を継続した。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析（2）」

総括 石橋崇雄
岸本美緒*、C.A. ダニエルス、柳澤 明*、武内房司

中国ではこの数年にみられる内外政治・経済・民族を中心とする国家事業が急進するなか、長期間に互って内在していた政治・経済・民族・文化問題が表面化している。チベットやウイグルをめぐる自治区の問題はその端的な事例であり、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んでいる。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題も現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。新たに用いられ始めている「中華民族」の呼称はその顕著な例として捉えうる。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。刊行予定の英文論文集にこれまでの成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸

領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と対外関係を分析する上で不可欠な檔案（公文書）類のうち、保存収蔵状況が未詳な檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、デジタル化し、向後の研究に貢献することを目的とする。

〔研究実施概要〕

- a) TBRL: *The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era*. [仮題] の刊行と平行して、欧文論叢 (TBRL) 『清代諸領域の歴史的構造分析』第1巻・清朝初期政治史研究 (1) ならびに欧文論叢 (TBRL) 『清代諸領域の歴史的構造分析』第2巻・『壇廟祭祀節次』の刊行を準備した。
- b) 前年度に引き続き、清朝政治史、清代中国社会経済史、清代中国近代政治史、清代モンゴル・露清関係史、清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて海外における図書館・檔案館・研究機関などに所蔵されている檔案文献史料類の史料調査・現地調査を実施し、旧来のマイクロ＝フィルム方式や新たなデジタル化方式による蒐集・整理・分析作業を行うと共に、中国で新たに影印されている大部の檔案文献史料類の蒐集することを進めた。
- c) 上記の文献史料類について、目録作成を進めると共に、デジタル化によって幅広い利用ができるようにした。同時にまたこれらの新規蒐集史料と東洋文庫収蔵の文献資料とを活用し、上記の課題に関する研究を推進し、その研究成果を個別論文・論文集・史料集などの形で公開することを目指した。欧文論叢 (TBRL) として準備した『清代諸領域の歴史的構造分析』第2巻・『壇廟祭祀節次』はその一環であり、東洋文庫所蔵の『壇廟祭祀節次』(漢文・満洲文) を取り上げ、広く中国の国家祭祀研究への大きな貢献をめざしたものである。

(4) 日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究 (2)」

総括	今西祐一郎
語学	酒井憲二、柳田征司、石塚晴通
文学	深沢眞二、上野英二、大谷俊太、辻本裕成、栃尾 武、 宮崎修多
思想・文化	齊藤真麻理、和田恭幸

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。2006年度までに室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題（Ⅰ～Ⅴ）を公刊したことを受けて、引き続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

〔研究実施概要〕

東洋文庫所蔵の岩崎文庫の中から、近世の成立ないしは刊行の貴重書の調査、研究基盤の整備、その成果の公開につとめ、2012年度には江戸期刊行・成立の歌書に関する『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅶ』を公刊した。

〈内陸アジア研究部門〉

(1) 中央アジア研究班

①「サンクトペテルブルグ所蔵古文献の研究－ウイグル文を中心として－」

総括	梅村 坦
ウイグル	庄垣内正弘
コータン	小田壽典、松井 太、熊本 裕

東洋文庫が入手したサンクトペテルブルグの東洋学研究所のマイクロフィルムのうち、ウイグル語とソグド語については『東洋文庫所蔵

St.Petersburg ウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録[第1稿]』として、初期の現地での実見データの一部を取り込んだフィルム番号整理一覧を、2002年に刊行した。その後、マイクロフィルムのデータを昨年までのプロジェクトでデジタル整理を続けた。ほぼ完成に至った目録の改訂版を原稿とし、冊子かデジタルデータの形で編集し直して刊行することは、内外研究者の要望に沿うことになる。ただし、東洋文庫と東洋学研究所の初期の契約の制約があるため、その刊行方法については慎重に検討をおこなうものとした。については、ウェブ上に未公開のものを含む大英図書館蔵のウイグル文字文献の一覧表などと合わせて刊行する可能性も検討したい。その中から、文書研究の成果についての論文をこれに付すこととする。

[研究実施概要]

- a) 研究班メンバー各自が、本データベースを利用しながら個別に古文文献研究を進めた。
- b) 『東洋文庫所蔵 St.Petersburg ウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録 [第1稿]』に記載されている古文文献（とくにウイグル語）に関する研究文献リストを追加作成した。
- c) 漢文文献として整理されていたマイクロフィルムの中に含まれるウイグル語文献について、2 - (1) - ③「漢語文献」グループとの連携のもとで、データ整理をおこなった。
- d) 「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵ウイグル古文文献目録（増補版）」作成のためのデータ修正を進めた。
- e) 本研究班の仕事と関連して、東洋文庫で開催された国際シンポジウム“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere”（2013年3月2～3日）の第1セッション“The Multi-dimensional Character of Central Asian Cultures as Seen from the Variety of the Scripts and Languages of Excavated Texts”に、研究班メンバーが参加し、中央アジア出土古文文献に関する議論をおこなった。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと政治権力」

総括 小松久男*
梅村 坦*、新免 康、濱田正美、長縄宣博、濱本真実、
堀川 徹

2012年度は関連する資料の収集のほか、いずれも東洋文庫で開催された講演会・シンポジウムで有益な研究報告に恵まれたことを特記しておきたい。まず、Stéphane Dudoignon (CNRS, Paris), “(Re-)Making the History of Soviet Islam: Some Emergency Tasks and Perspectives” (2012年9月28日)は、ソヴィエト期およびポスト・ソヴィエト期のイスラームを理解するには、「公式」および「非公式」のイスラームのような単純な二分法的な分析枠組みを乗り越える必要があること、また各地の宗教界の動態をミクロの視点から、当事者からのインタビュー調査などの手法によって解析する必要性を指摘して今後の研究に大きな示唆を与えた。次に、秋山徹(日本学術振興会特別研究員)「パートゥルたちの「近代」:クルグズ遊牧社会とロシア帝国」(2013年2月19日)は、帝政ロシア統治下の遊牧クルグズ首領層がイスラーム的な価値や権威を積極的に活用することにより政治・社会的な地位の保全をはかったことを実証するものであり、近代のクルグズ社会におけるイスラームの意義を再検討する機会となった。最後に、東洋文庫の国際シンポジウム Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere の第3セッション The Revival of Islam in Central Asia: Links with West and South Asia では、現代中央アジアにおけるイスラーム復興を考える上で南アジアおよびイランとの関係はきわめて重要な意味をもつことが確認された。以上の報告は、今後の研究に指針を与えるにちがいない。

[研究実施概要]

- a) 引き続き海外における史料収集を行う。タシュケント(ウズベキスタン)、カザン、サンクトペテルブルク(ロシア)などの図書館や研究機関のほか、各地の民間に所蔵されている史料の収集を現地の研究者や所蔵者の協力を得て行う。
- b) a)の史料のうち、とくに定期刊行物についてはデジタル化によって幅広い利用ができるようにし、文書史料については目録作成を進める。
- c) 新規収集史料と東洋文庫の蓄積してきた豊富な文献資料とを活用し、研

研究会の開催などを通して、上記の課題に関する研究を推進する。あわせて、その成果の刊行に努める。

- d) 東洋文庫で開催された国際シンポジウム“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere”（2013年3月2～3日）の第2セッション“The Regional Image of Central Asia as Portrayed in 18th-20th Century Historiography: Central Asian, Chinese and Russian Perspectives”、第3セッション“The Revival of Islam in Central Asia: Links with West and South Asia”、に研究班メンバーが参加した。

③「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文献マイクロフィルム目録のデータベース化」

総括 土肥義和
梅村 坦*、片山章雄、妹尾達彦*、荒川正晴、
氣賀澤保規、關尾史郎、池田 温、岡野 誠

2002年に東洋文庫が世界にさきがけて入手した東洋学研究所の内陸アジア出土文書マイクロフィルム（全363リール、約25万齣）には、4、5世紀から15世紀に及ぶコータン・サカ語、西夏語、チベット語、ウイグル・ソグド語、漢語、チャガタイ・トルコ語、サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語、満州語、モンゴル語の11言語の文書が含まれている。このフィルム資料の目録をデータベース化してそれを公開することは、わが国だけでなく、諸外国の研究機関・研究者の希求するところ切なるものがある。

本研究は、上記フィルムの中からとくに漢語文献を抽出してそのフィルム目録のデータ化を図るとともに内陸アジア出土漢語文献の特性を明らかにすることを目的とする。

[研究実施概要]

- a) 敦煌出土文献 Reels 256～363のうち、漢語文献のある40リール（266～277、279～286、292、334～337、349～363）についてリールに付された各文献整理番号とその齣数とを対照させた仮目録を完成し、各文書に付された文献番号の「索引」作りに着手した。
- b) 前年度に引き続き、『俄蔵敦煌文献』（上海古籍出版社、1993）中の未収

録漢語文献約 700 件について、内容の検討を行った。

- c) 上記サンクトペテルブルク所蔵ウイグル・ソグド文字文献全 31 リールのうち、21 リールに含まれる漢語文献約 1,100 件余りについて、文献番号とその microfilm 齧数とを対照した「仮目録」を作成した。
- d) 上記サンクトペテルブルク所蔵チベット語文献（全 35 リール）のうち、6 件の漢語文献を明らかにした。
- e) 本研究班における第 2 次研究成果として 2014 年度に『敦煌・吐魯番出土漢語文献の様式・特性の研究』（仮）の出版を計画している。そのために、定期的に「内陸アジア出土古文献研究会」を行うとともに、新たに「8 - 11 世紀内陸アジア出土漢語文書輪読会」を開催した。
- f) 本研究班の仕事と関連して、東洋文庫で開催された国際シンポジウム“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere”（2013 年 3 月 2～3 日）の第 1 セッション“The Multi-dimensional Character of Central Asian Cultures as Seen from the Variety of the Scripts and Languages of Excavated Texts”に、研究班メンバーが参加し、中央アジア出土古文献に関する議論をおこなった。

(2) チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌的研究 (2)」

総括	吉水千鶴子
仏教思想	川崎信定
敦煌文献	武内紹人
ボン教	御牧克己
宗義文献	松濤誠達
歴史	山口瑞鳳
密教図像	立川武蔵
言語	星泉

チベット研究班においては、新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかることを目的とする。収集した

資料については目録化を行い、データベースを作成すると同時に、敦煌チベット語文献、河口慧海将来文献などとともに東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献として写本校訂と訳注研究を行い、電子データベースあるいはシリーズ刊行物として公開する。以上の3点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指すものである。

[研究実施概要]

- a) 資料収集：近年中国で新たに発見された10～13世紀のチベット語写本の影印版を収集した。チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を購入し、コレクションの体系的な充実をはかった。
- b) a)によって収集した資料の整理を行った。
- c) チベット人研究協力者の協力のもとに、次の研究を行なった。
 - 1. 筆記体写本の校訂：古いチベット語写本の多くは手書きの筆記体で書かれており、一般研究者には解読が難しいものがある。それらをチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキストデータベースを作成した。
 - 2. 1のデータベースをもとに文献の解題を作成した。
- d) Studies in Tibetan Buddhist Text vol.1 (シャン・タンサクパ『中観明句論註釈』第1分冊)を刊行した。

〈インド・東南アジア研究部門〉

(1) インド研究班

「インド刻文史料の蒐集と研究」

総括	辛島 昇
サンスクリット	
	小名康之
ウルドゥー	萩田 博
ドラヴィダ	太田信宏、水野善文、石川 寛
アーリヤ	三田昌彦

インド（南アジア）の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者し

かいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究における根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。

他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云いうる。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。

そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫に所蔵のない刻文史料や、欠けているものについて、インド独立後の新しい出版物（とくに、出版状況が明らかでない州政府考古学局等のもの）を購入、あるいはコピーの形で収集することにしてきたが（未出版刻文のトランスクリプトは、許可を得て、マイソールの刻文部でコピーして蒐集する）、2012年度には、班の予算をインド人研究者の招聘に充て、班メンバーが然るべき時期にインドを訪問出来なかったため、刻文関係の資料収集は、*Dictionary of Social, Economic, and Administrative Terms in South Indian Inscriptions*, Ed. by K.V. Ramesh, General Editor R.S. Sharma, Vol. I (A-D), ICHR, New Delhi: Oxford University Press, 2012, その他、ごく少数にとどまった。2013年度には、メンバーがインドを訪れ、その蒐集に努めたい。
- b) 個々の研究者による研究としては、班の各メンバーがこれを活発に行った。なお、2013年度には、東南アジア研究班と共同して、南アジアおよび東南アジアにおける国家および社会統合について、刻文を史料とした研究を班として行う予定である。

(2) 東南アジア研究班

「近現代東南アジアに関する史料研究」

総 括 弘末雅士
 嶋尾 稔、桜井由躬雄、北川香子、坪井祐司、
 牧野元紀[◎]

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第二次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この40年間に飛躍的な研究の発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目を浴びてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な資料となりうる。本研究は、従来力点が置かれた日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果たした日本人の役割の視点からその記述を検討し、日本人をはじめ中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した近代東南アジア社会の特質について研究する。

〔研究実施概要〕

- a) 近代東南アジアの都市の社会統合に果たす日本人の役割に関する文献資料の収集と整理を行なう。合わせて、第二次世界大戦後に出版された戦前・戦中期の日本の東南アジア関係の文献の目録を作成する。
- b) 東南アジアの主要都市を訪れ、日本人を含む外来系住民の居住空間の歴史的展開を調査する。
- c) 研究会を開催して文献調査や訪問調査の成果をもとに議論を構築する。その成果を、本プロジェクト終了年度に、出版物として刊行する計画を進める。

〈西アジア研究部門〉

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究（2）」

総括	三浦 徹
トルコ	永田雄三、磯貝健一、林佳世子
契約観念	後藤 明
トルコ・ペルシア	清水宏祐、堀川 徹*、守川知子、矢島洋一
アラブ	佐藤健太郎、高野太輔、原山隆広 [◎]

ワクフ（宗教的寄進）は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。ワクフに関わる、法学書、年代記、地理書などの叙述史料とワクフ寄進文書や調査台帳などの文書史料を収集し、諸地域における実態と歴史の変容を解明する。また、第一期からの継続課題であるヴェラム文書（16-18世紀にモロッコで作成された皮紙のアラビア語契約文書、東洋文庫所蔵）について、文書の校訂と研究をすすめ、その成果を英文で出版する。

[研究実施概要]

- a) ヴェラム文書について、文書テキストの解読のための研究会を月例で開催し（計12回）、東洋文庫が所蔵する8点の皮紙文書の校訂テキストを作成し、モロッコの現地研究者との閲読を行い、関連資料の収集・調査を行った。
- b) ワクフ文書の総合的研究にむけ、フランス CNRS 国際共同研究プログラム（研究代表者マルセイユ＝エクサンプロヴァンス大学 R・ドゥギエム教授）と連携し、同プログラムが主催するワークショップに参加した（7月、12月）。イランのワクフ寄進台帳（マシュハドのイマーム・レザー廟、19世紀）の校訂・研究の出版準備作業を進めた。

C. 資料研究

〈資料研究部門〉

東アジア資料研究班

「東アジア資料の研究」

総括	斯波義信 ^{◎*}
総括補助者	田仲一成 [◎]
日本	浅野秀剛、片桐一男、永積洋子、延廣眞治、吉田伸之
中国	丘山 新、小川裕充、佐藤慎一、鈴木博之、戸倉英美、 濱下武志 ^{◎*} 、矢吹 晋 [*] 、平勢隆郎、片山 剛
朝鮮	藤本幸夫
内陸アジア	森安孝夫
情報	廣瀬紳一

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

〔研究実施概要〕

- a) 中央研究院歴史語言研究所との間の交流協定により、同所の作成した漢籍文献データベース（収録件数 300,000,000 件）の提供を受ける一方、東洋文庫所蔵もモリソンパンフレット、マイクロフィルム 100,000 コマを提供した。
- b) 東アジア郷村祭祀資料の収集とデータベースによる公開
中国天津、南開大学文學院副教授呉真氏を招き、日本の郷村祭祀の現地調査を共同して実施した。夏 8 月には、静岡県水窪町の中元節念仏踊り、奈良県法隆寺の盂蘭盆供養、春日大社の萬灯会、冬 1-2 月には、長野県阿南町新野の雪祭り、大分県黒仁田の高千穂神楽、山形県櫛引町の黒川能などを調査した。これらの映像資料は、データベースを構築して、文庫ホームページから公開する予定である。
なお、1978 年以來の中国の祭祀演劇に関する東洋文庫所蔵動画資料の一部（香港海陸豊劇）もホームページから公開した。同カラー写真資料 15,000 枚もデータベースとして、来年度中に公開する予定である。

c) 南京図書館との交流

南京図書館善本特蔵室の研究員、周艶氏を招き、文庫所蔵の善本の書誌情報につき、共同調査を実施した。

D. 地域研究プログラム

(1) イスラーム地域研究資料室

「イスラーム史料情報学の開拓」

室長 三浦 徹*
堀川 徹*、近藤信彰、大河原知樹*、磯貝健一*、
秋葉 淳*、渡辺浩一、柳谷あゆみ、徳原靖浩

現地語史資料の所蔵・整理・利用環境に関するアンケート調査の結果を踏まえ、現地語史資料の体系的収集を継続し、共同利用を促進する。調査やアラビア文字資料司書連絡会等で得た情報や要望に基づき、現地語史料の整理・書誌データ作成のための補助ツールや資料の作成と公開、「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」の編集をはじめとする関連データベースの拡充を進める。また、史料研究について、原典講読会および国内研究機関との連携による研究活動を実施し、研究情報の共有と若手研究者の育成をはかる。これらによって、史料および研究文献の収集と整理（情報化）と利用の3つの局面を連結したサイクルを築き、国際的な共同利用にむけた環境改善をはかる。

[研究実施概要]

- a) 現地及び海外のイスラーム地域研究の動向と、東洋文庫等の国内機関の所蔵状況を踏まえ、現地語史資料の継続的・体系的な収集と整理を行った。「日本における中東研究文献データベース 1868～」は、2013年3月現在で45,700件の書誌データを収録し、月平均1,000人（閲覧数は3,000回）の利用をえている。学生の情報検索スキルを高め、現地語史料の利用を促進するため、「卒論を書くための情報検索リテラシーセミナー」(第2回)を8月に開催した。募集開始直後に参加者が定員に達し、セミナーの需要と認知度の高まりが確認され、参加者の評価も良好であった。3月に

は「アラビア文字資料司書連絡会」（第7回）を開催し、現地語資料の収集と整理に関わる最新のトピック（NIIの目録規則の切換えなど）について、主要大学図書館、国立情報学研究所など関係機関の担当者らと情報共有・意見交換を行った。

- b) 史資料の研究活動や、研究で得られた知見を広く還元する各種セミナーを継続しており、様々な層の参加者が集まることで、従来の大学内のゼミでは見られなかったような相互作用が顕著になってきた。「シャリーアと近代」研究会は、オスマン民法典アラビア語版の講読・翻訳のための研究会を計9回行い、歴史や法学の研究者に加え、弁護士・実務者など幅広いメンバーの精力的な参加によって、全体の約1/3にあたる「賃約の書」537条までの訳稿を作成した。刊行ずみの序篇(1-100条)につづき、「売買の書」(101-403条)のウェブ公開と、語彙集の作成を進め、イスラーム法と近代制定法とを架橋する役割が明らかになりつつある。「オスマン帝国史料の総合的研究」研究会は、オスマン帝国史の多様な史料を類型ごとに解説するウェブ資料「オスマン帝国史料解題」を更新増補したほか、オスマン帝国における教育・知識社会史に関わる研究会を4回行った。他機関との連携プロジェクトである中央アジア法制度研究会、中央アジア古文書研究セミナー、オスマン文書セミナーは、専門的な史資料を扱うセミナーでありながら、毎年恒例のものとして多くの分野や若手の参加者を得ており、現地語史資料に基づいた地域研究の裾野は着実に広がっている。フランス CNRS のワクフ国際共同研究事業に参画し、国際連携を強化した。

(2) 現代中国研究資料室

「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」

室長 土田哲夫*
 高田幸男*、内田知行、大澤 肇、貴志俊彦*、
 久保 亨*、小浜正子*、瀧下彩子◎*、田中 仁、
 中村元哉、内山雅生*、相原佳之

第一期の成果をもとに、現代中国関係資料を所蔵する国内外諸機関との連携を強化し、資料の系統的・効率的収集の態勢づくりを行う。既収・新収の

現代中国関係資料の分析を通じて、近現代中国の変容について解明を進めるとともに、他拠点・他機関の協力を得つつ資料研究の成果を社会に向けて発信する。NACSIS-CAT への東洋文庫資料の登録を継続し資料利用の促進を目指す。またウェブ公開できる準備が整った資料については電子図書館で公開を進める。

[研究実施概要]

- a) 資料利用環境の整備および国内外諸機関との連携については、国立情報学研究所との連携により NACSIS-CAT への書誌登録を継続して行った。本年度中に約 4,500 タイトルの東洋文庫近代中国研究委員会（現・近代中国研究班）収集資料が登録され、登録タイトル数は 44,000 件あまりとなった。
- b) 電子図書館についても、引き続き拡充に努めた。画像をインターネットで完全公開している資料は 351 タイトルに増加した。また目次から検索できるシステムの整備など、利用環境を向上した。さらに中国の多くの高等教育機関が参加している図書デジタル化プロジェクト（CADAL（China Academic Digital Associative Library. 大学数字図書館国際合作計画））の担当者を招いたワークショップを開催し、図書デジタル化の最新状況を聞いた。
- c) 資料研究活動については、編成された 5 つの研究班のもとで、非常に活発に行った。研究班体制の初年度として、それぞれの組織や今後の運営方針を固めただけでなく、研究協力者の協力のもと、他機関・他大学との共催も含めて計 21 回の研究会・シンポジウムが開催された（江南地域社会班 5 回、図画像資料班 4 回、ジェンダー資料班 6 回、政治史資料班 4 回、1950 年代資料 3 回）。活動の成果として、近代中国の知識人が残した手書き日記の一部を活字化し注釈をつけた「王清穆『農隱廬日記』(2)」を『近代中国研究彙報』に公表した。
- d) 東洋文庫ミュージアムとの共催で、同所の企画展示に関連した一般向けの講演会を行い、多くの聴衆を集めた。また東洋文庫研究部との協同で所蔵資料「汪政權駐日大使館文書」の目録作成事業を開始した。

E. 受託研究

特色ある共同研究拠点の整備の推進事業

「イスラーム地域史研究資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」

室長 三浦 徹*
堀川 徹*、近藤信彰*、大河原知樹*、磯貝健一*、
秋葉 淳*、徳原靖浩*、近藤敦子*

本委託業務の目的は、ネットワーク型共同研究「イスラーム地域研究」の発展によって、グローバル化した現代のイスラーム理解を深化・向上させ、その成果を学界及び広く社会に還元すべく国際的な広がりを持つ新時代の共同研究拠点を構築することにある。また、共同研究実施にあたり、国内では公募研究を通じて幅広い人材の参加を促進し、国際的には研究者の協力のネットワークの強化を行い、さらに研究支援組織としても管理業務環境を整備・強化した事務体制を構築する。

財団法人東洋文庫では、イスラーム地域研究の史資料センターとしての役割を果たすべく、引き続き、史資料の収集・利用の促進と、イスラーム史資料学の開拓に関わる研究開発を実施している。

[研究実施概要]

- a) 「イスラーム地域研究」の史資料センターである東洋文庫拠点の整備強化
 - ・イスラーム地域の史資料の収集・整理・利用に関わる研究活動のさらなる発展と集中的な史資料収集および資料整理・データベース入力事業を強化するため、必要なツール類を購入し、活動環境を整備するとともに、研究活動および管理業務活動の効率化を図った。購入図書リスト（PDF版）をウェブサイトで公開し、利用に供した。
 - ・拠点強化事業：「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」週及入力事業を実施した。
 - ・大学学部生・院生を対象に第2回「論文を書く学生のための情報検索リテラシーセミナー」（共催：NIHU イスラーム地域研究東洋文庫拠点）を開催した。
- b) 「イスラーム地域研究」の成果の発信の強化充実
 - ・公募による共同研究課題「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」（研究申請者：

高松洋一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授）において、定例研究会の成果である訳註本を出版した。

- ・拠点強化事業「日本における中東・イスラーム研究データベース遡及入力事業」を遂行すべく、当該地域・分野の文献書誌を調査し、データベース化を行い、ウェブサイトで公開した。

c) 「イスラーム地域研究」の強化と公募による拠点拡大

- ・公募による共同研究課題「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」（研究申請者：高松洋一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授））の活動を実施した。研究資料の収集および調査を進め、定例研究会やセミナー、講演会を開催し、成果発表を行った。また、国内外より研究協力者の参加を促し、研究の深化・拡大を図った。

F . 日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究

1) 研究成果公開促進費（データベース等）

(1) 「東洋学多言語資料のマルチメディア情報システム」

[東洋文庫電算化委員会委員長：斯波義信]

[目的]

本プロジェクトは、東洋学に関する世界5大機関の一つに数えられる研究所・図書館である財団法人東洋文庫が80年にわたり収蔵してきた言語種類50数種、部数約500,000件、冊数約1,000,000冊におよぶ大量の多言語資料を、書誌データのみならず、図像・地図などの画像資料、Video・DVDなど動画資料をふくむマルチメディア・データのレベルまで拡大してデータベース化し、これをインターネットを通じて、内外の研究者が自由に検索できるようにすることを目指している。書誌データは1994年度に入力を開始して以来、約15年を経て、600,000件に到達し、完成の目途ができてきた状態にあり、これを踏まえて、2004年度以降はデジタル撮影の手法によるマルチメディア・データの構築に重点を移した。従来、岩崎文庫・モリソン文庫・梅原考古器物などは、マイクロフィルムによる複製保存を行ってきたため、現在まで約6,000件、1,000,000コマを超える貴重書フィルム（35mm）を所蔵している。これをスキャナーにより画像に取り込み、全頁データベースとして公開してきた。また、地図・絵画・貴重書全頁データについては、

最新技術によるデジタル撮影により精度の高い画像データベースを構築してきた。更に1970年代以来、中国の現地調査で得られた「農村の祭祀と演劇」に関するVideo資料を動画データベースとして公開する計画も一部実行してきている。これらの努力の結果、2002年度において毎月2,000件であったアクセス数は、2008年9月末の段階で、当初の50倍、100,000件に到達した。今後は、書誌データについては、分類による検索を付加して、利用者の検索を容易にし、画像データについては、引き続きデジタル撮影を継続して、その量的拡大とメタデータの充実をはかる。また、動画については、この3年間に400分(5時間)をUpしたが、一層の充実を目指す。

[研究実施概要]

- ・ 動画「李碧蓮搜宮」
- ・ 彩色絵画「繪本暴風夢」他1,335点
- ・ 古地図「増訂伊豆七島全圖」及び「無人島八十嶼圖」、「相武房縷海岸圖」他281点
- ・ モリソンパンフレット [The Chinese almanac] 等1,381点

(2) 「清朝前期のチベット仏教政策」

[日本学術振興会特別研究員：池尻陽子]

[目的]

本書は、申請者が平成21年度に筑波大学大学院人文社会科学研究科に提出した博士(文学)学位論文「清朝前期のチベット仏教政策の研究」を基礎としつつ、その後の研究成果を盛り込んで増補改訂を施したものである。その内容は、清朝前期(本書では主に清朝建国から最盛期とされる乾隆期までとする)に清朝が推し進めたチベット仏教に関する諸政策について、清朝がチベット仏教僧を自らの内に位置づけるべく独自に構築した秩序体系である「扎薩克喇嘛(ジャサク=ラマ)制度」の成立・展開の様相という側面から分析することによって、清朝がいかにしてチベット仏教的世界観を共有する諸勢力と対峙していったのか、その具体的な手段と達成の度合いを提示するものである。そしてその作業を通して、清朝という多様で巨大な政権について、ひとつの実像を描出する。

本書刊行の目的及び意義は、本書が清朝の扎薩克喇嘛制度を専論する世界初の研究書として刊行される点にある。従来の研究では、17・18世紀の清朝のチベット仏教政策が清・モンゴル・チベット外交史の枠組みにおいて論

じられ、政策実行者である清朝の実情については未だ十分に解明されていないのが現状である。清朝にとって扎薩克喇嘛制度は、チベット仏教僧たちを支配構造の中に位置づけコントロールするための唯一の組織であり、且つ、チベット仏教世界を構成する外部勢力に対する介入手段でもあった。この両方の視点から、本書は扎薩克喇嘛制度の成立・展開の歴史と具体的な政策を解明していくものである。

[研究実施概要]

『清朝前期のチベット仏教政策』 1冊 汲古書院刊

2) 基盤研究B

(1) 「1910～30年代における日本の中国認識—華北地域を中心に」

[研究代表者：本庄比佐子] (2009年度採用、5ヶ年間・第4年度目)

[目的]

1910～30年代に日本の各種研究調査機関が中国華北地域で実施した調査活動を網羅的に整理するとともに、その調査内容と同時期の中国側資料や近年の研究成果などを比較検討することを通して、当該時期における華北地域の政治・経済・社会文化、及び日中関係の特質を歴史的・総合的に考察することを目的とする。

- 1) 我々がこれまでに行った興亜院や青島守備軍の調査活動に関する研究成果を基礎に、満鉄北支経済調査所・東亜研究所、その他研究機関などによる調査も含め、日本による華北調査の全体像を明らかにする。
- 2) 中国側の資料と研究成果などを参照しながら、20世紀前半における華北地域の変化の過程を明らかにする。
- 3) 中国の研究機関・研究者との交流・共同研究を進展させる。

[研究実施概要]

昨年度に開催した公開シンポジウム「華北の発見」における報告を基に、論文集として刊行するための準備作業を行った。まず、シンポジウムで各報告に寄せられたコメントと総括的討論を検討したのち、報告者は必要な調査を行って以下のように論文第1稿を作成した。

地域概念に関しては、日本語文献の分析に基づいた「華北地域概念の形成と日本」、いわゆる「外地」の日本人社会における華北認識を解明する「『朝鮮及満州』における〈華北〉認識の展開」、「新聞記事から見る華北認識」、中国の西北概念の考察を通して華北を考えようとする「〈西北〉概念の変

遷]、「戦時期華北に暮らした日本人にみる中国・華北（北支）・山西」、「中国における近代華北地域史研究の現状と展望」、ドイツにおける華北認識を考察した「ドイツ・中国関係史からみた華北」の7編が提出された。地域史研究の分野では、日本人研究者の華北概念を考察した「戦中期の日本の中国農村研究と〈華北〉」、農産物の生産状況から華北の範囲を考える「近現代華北農村経済の特質について」、村落の祠・廟における祭祀をとりあげた「民間信仰からみる近代江南農村と近代華北農村」、戦前期日本人の観光旅行から考えた「旅先としての〈華北〉」、戦中期に日本人が調査した4農村の現在における変化を考察した「追跡調査から見た華北農村の変化」、政治的中心の都市から鉄道網の整備に伴い経済中心都市へ変わる問題を論じた「華北における近代交通システムの形成と都市の変動」、農村集団化時期を取り上げた「村档案から問い直す現代華北農村」の7編が提出された。以上の第1稿について、外部の関係者からコメントを聴く会及びメンバー相互のコメント交換を行い、最終稿への準備を整えることができた。

(2) 「イスラーム法の近代的変容に関する基礎研究：オスマン民法典の総合的研究」

〔研究代表者：大河原知樹〕（2011年度採用、3ヶ年間・第2年度目）

〔目的〕

本研究の目的は、19世紀半ばにオスマン帝国によって編纂されたメジェッレ（Mecelle-i Ahkam-i 'Adliye：以下M法典と略）の内容、性質および位置づけの再考を通じた、中東における近代の法制度改革と現代の法制度への影響の批判的検証である。

本研究は、M法典の総合的研究であり、そのためにまず法典全1851条の訳文を確定することを最大の目標とする。そのためには、年間10回程度の研究会を開催し、条文ごとに訳語を確定する。最終的に公開できる段階まで達した各条文には詳細な訳注を付して、刊行その他の手段によって公開する。これは近代法、イスラーム法およびイスラーム地域研究に関心をもつ研究者が簡便に利用できるようにする。M法典に関する基本文献、研究文献、研究資料は日本ではごくわずかしか収集されていないため、これを期間内に積極的に収集し、広く研究者たちの利用に供する。

〔研究実施概要〕

オスマン民法典（メジェッレ）の講読と、翻訳作成を目標に、計9回の研

究会を行った。アラビア語テキスト第396条から537条までの検討を行った。第1回を除く、すべての研究会で「第2篇賃約の書」を検討し、まず、賃約とは「一定の対価と引き換えに一定の用益を売却すること」という大原則を確認した。実際の契約において、賃約と売買がどのように異同があるのかを確認することが要点となった。たとえば、「売買の書」が定める各種の選択権は、賃約にも準用されることが各所で明記されるが、これは両契約の同質性の最たるものであろう。

今年度は、さらに多彩な分野からの参加者も増え、各種翻訳の対照作業が可能になったため、より詳細に条文を検討することが可能となったが、反面、一回あたりの検討条文が減った。基本用語として用いられる語(たとえば、「拘束」「適正」「不適正」など)は、日本民法との違いを改めて確認しつつ訳語の検討を進めた。

アラビア語、オスマン・トルコ語、英語、フランス語を駆使して判明した内容の相違は重大なものから些細なものまで多岐にわたるが、あくまで翻訳の底本がアラビア語版であるため、そのニュアンスを活かしつつ、正文や各種訳の意図を可能な限り盛り込む難しさが浮き彫りとなった。ただし、このような相違はアラビア語版のオスマン民法典がオスマン帝国崩壊後のアラブ諸国やイスラエルにどのように継受されていったかを研究する上で必要欠くべからざる作業であると考えられる。

なお、第6回研究会において、近藤信彰氏(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授)による報告「19世紀アフガニスタンにおける法廷制度をめぐって—『カーディー達の基礎』の位置—」を開催した。

(3) 「モノ」の世界から見た中世イスラームの女性～ガラス器と陶器を中心に～

[研究代表者：真道洋子] (2011年度採用、4ヶ年間・第2年度目)

[目的]

考古学、美術史、建築史、文献史学の観点から「モノ」を対象として、物質文化史から垣間見られる中世イスラームの女性の生活についてアプローチすることを目的としている。物質資料から女性そのものを明らかにすることはなかなか困難な作業であるが、この研究では、当時の女性論やジェンダー論を論じるのではなく、女性の周囲に存在していたと想定される生活用品などから多角的に文化をとらえ、生活文化の復元を目指している。既定の学問

領域の枠を超え、女性を中心にその時代に生きた生の人間像を意識して、中世イスラーム時代の生活文化の諸相を解明しようとする新たな試みを提示したい。

[研究実施概要]

本年度は、研究代表の真道がカタールとバーレンにおいてイスラーム関連美術品の収蔵品調査を実施し、深見奈緒子がチュニジアにおけるイスラーム建築調査、小林一枝がフランスで写本調査などの海外調査を実施した。さらに、法門寺や陝西省歴史博物館に収蔵のイスラーム文物やモンゴル関連資料の調査のために、真道と研究協力者の四日市康博、竹田多麻子、王博とで西安調査を行った。このほかに、国内においても名古屋や岡山において資料調査を実施した。研究報告及び発表に関しては、研究代表者真道がスロヴェニアの国際ガラス史学会においてナツメヤシ文ガラスに関する研究発表を行った。国内でも、東洋文庫において8回の研究会を実施し、このうちの1回はエジプト大使館との共催でユネスコのProf. Gihane Zakiと真道が女性の化粧関係の発表を行う公開講演会の形で実施した。このほかにも研究代表者および連携研究者、研究協力者がおのおの関連学会や研究会で成果発表を行った。

また、今年度も引き続き、イスラーム美術品および考古遺物関連資料の画像取り込みとデータベース化を実施した。

3) 基盤研究C

(1) 「近代トルコの地方名士—マニサ地方を中心に—」

[研究代表者：永田雄三] (2010年度採用、3ヶ年間・最終年度)

[目的]

本研究は、申請者が長年研究を続けてきたトルコの地方名士（アーヤーン）に関する研究の一部である。地方名士に関する研究は、トルコに限らず、オスマン帝国（1299～1922）の支配下に置かれていた中東およびバルカン地域の18世紀から19世紀にかけての政治・社会・経済・文化の全般におよぶ最も重要なテーマであり、当該地域に対する歴史的理解の前提である。申請者はこれまで主として前近代トルコの地方名士研究を行い、その成果を和文・トルコ文・英文による論文・著書として公表してきた。本研究は、その結果をふまえて、新たに近代における地方名士層の国家および在地社会との関係の変容過程を明らかにしようとするものである。申請者は、日本人としての視点から、明治維新変革の担い手の一角を占めた豪農層、中国の郷紳層、イ

ギリスのジェントリ層など、同時期の世界史上にあらわれた「名望家」層との比較研究を射程に入れている。

[研究実施概要]

本研究は、トルコの地方名士（アーヤーン）に関する研究の一部である。地方名士に関する研究は、トルコに限らず、オスマン帝国支配下に置かれていた中東およびバルカン地域の18世紀から19世紀における政治・社会・経済・文化の全般におよぶ最も重要なテーマであり、当該地域に関する地域研究の歴史的前提である。アーヤーンに関する従来の研究は、かれらの富と権力の基盤は、地方官職と不可欠な関係にある徴税請負制による利潤と農産物の市場化過程の掌握にあるとされてきた。これにたいして筆者は、これに加えてチフトリキと呼ばれる大農経営とワクフと呼ばれるイスラムに固有な寄進制度にもとづく、地域で獲得された富の地域社会への還元行為の重要性を指摘してきた。

本研究は以上のような問題提起をさらに確実にするべく、1845年に実施された「資産台帳」のうち、マニサ県マニサ郡にかかわる合計66冊の「資産台帳」に記載された約3万人分のデータを分析した。その結果、タンズィマート改革（1839-76）による中央集権支配の地方社会への浸透と、1838年の英土通商条約を契機とした国際貿易の拡大とによってもたらされた急速な社会変容にもかかわらず、本研究が直接の対象とするマニサ地方随一のアーヤーン家系（カラオスマンオウル家）の当該社会における影響力は、チフトリキ大土地所有をもっとも有力な基盤としてなお存続し続けていたことを確認することができた。だが、一方では、たばこ、綿花、アカネ（トルコ赤染料の材料）などの商品作物の栽培と商品化を基盤とした新たな社会層の台頭もみられ、アーヤーン層の地域社会におけるプレゼンスが次第に相対化されつつある実態も観察された。本研究の成果の一部は東洋文庫の英文紀要（70号）で国際的に報告された。

(2) 「内陸アジア出土4～12世紀の漢語・胡語文献の整理と研究」

[研究代表者：土肥義和]（2010年度採用、3ヶ年間・最終年度）

[目的]

本研究は「内陸アジア出土4～12世紀の漢語・胡語文献の整理と研究」と題して3年間の計画で遂行するものである。旧来、中国の正史に代表される編纂史料を中心に進められてきた内陸アジア諸地域（敦煌やトルファン、

ホータン、チベットなど)の諸民族の歴史に対して、本研究は、現地で各時代に作成された漢語文献・胡語文献(非漢語諸民族文献)を用いて、とくに内陸アジア諸民族の文化や社会の諸相について新考察を加えることを目的とするものである。

具体的には、研究期間中、まず(1)東洋文庫が近時、ロシア科学アカデミーから入手した内陸アジア出土文書のmicrofilm(約25万齣)に含まれている4~12世紀に書かれた漢語・胡語文献の「文献番号・齣数対照目録」を作成し、かつ(2)そこで抽出された文書資料を、関連する漢語・胡語文献の資料群の調査結果とも比較して分析することによって、胡漢諸民族の文化や社会の諸問題を究明する。

[研究実施概要]

研究代表者土肥義和と研究分担者岡野誠・片山章雄の3名は、研究実施計画にもとづき、以下の整理作業と調査研究を行なった。

- 1、東洋文庫がロシア科学アカデミーから入手した内陸アジア出土文書マイクロフィルム363リール中の、古ウイグル・ソグド語文書マイクロフィルム30リールに含まれる胡語・漢語文書を抽出し、「文書番号・齣数対照目録」のデータベース化の方針を決めて作業を行い、胡語文献の裏面に書写された漢語文献の内容目録の草稿を作成した。なお、そのうちの非仏教関係文書については、録文集を作成するとともに、それぞれの史料を評価する段階に入った。
- 2、関連する漢語・胡語資料の所蔵機関の調査については、旅順博物館における現地調査を継続した。分担者片山は、研究協力者とともに、旅順博物館と龍谷大学とに分蔵される文書断片の綴合案を提示し、発見当初の靈芝雲の外貌を復元した。そして、その成果をふまえて、代表者の土肥が、靈芝雲型官府文書について考察した結果を公表した。また、分担者岡野は洛陽においてソグド系の「安善夫妻」の墓と墓誌を調査し、その成果を公表した。
- 3、代表者土肥は、敦煌仏教文化との比較や供養人題記を分析するため、同行の分担者・補助者、日中の協力者らとともに、河南省における宋代寺院石刻資料を収集してきたが、開封市の繁塔に見える北宋初期の仏教石刻資料調査については一定の区切りに到達した。また、参考資料として鄭州開元寺の石棺銘を調査した。それらは、報告書年度分冊に、主編者として関係者名も示し資料集補遺のかたちで提示した。

以上のうち特に調査研究については、資料所蔵先の事情もあるのでイン

ターネット上での成果公表は控え、報告書冊子を作成してその中で成果を共有することとした。

4) 若手研究

(1) 「ジャウイ史料の利用によるマレー民族の形成過程の研究」

[研究代表者：坪井祐司] (2012年度採用、4ヶ年間・初年度)

[目的]

『カラム』を中心としたジャウイ（アラビア文字表記のマレー語）の定期刊行物の分析を通じて、脱植民地化期の島嶼部東南アジアにおけるマレー人という民族集団の形成過程を再検討する。1950、60年代のシンガポールにおいてアラブ系の編集者により発行された月刊誌『カラム』（京都大学所蔵）の分析に加えて、海外におけるジャウイ定期刊行物の収集、分析により、マレー民族の形成に外来者が果たした役割を再検討する。これにより、マレーシア（マラヤ）のナショナル・ヒストリーの枠内で単線的にとらえられてきた従来のマレー民族概念を相対化し、その形成過程を島嶼部東南アジアの脱植民地化における多様な勢力の競合の結果として動態的に描くことを目指す。

[研究実施概要]

京都大学地域研究統合情報センターにおいて『カラム』に関する共同研究「島嶼部東南アジアにおける国民国家形成とマレー・ムスリムのネットワーク」（2012年度）を組織し、論文集『カラムの時代IV：マレー・ムスリムによる言論空間の形成（CIAS Discussion Paper No.32）』を2013年3月に編集、出版した。本書では、『カラム』が他の媒体を積極的に引用し、論争を行ったことに焦点をあて、マレー人の言論空間の多様性を明らかにした。本書において、「マラヤの独立とシンガポールのマレー・ムスリム」という論文を執筆し、『カラム』が現在進行中の独立とは異なる国家像を提示したことを示した。

2013年1月にマラヤ大学にて開催された国際セミナー「イスラームと多元文化主義」において、共同研究を核にセッションを企画した。そこでは、1950年代前半の『カラム』のマラヤ政治に関する論説を分析し、イスラームの制度化を志向する同誌の戦略について報告した。

それとともに、ジャウイの教育活動にも携わった。2012年12月1、2日

に「ジャウィ文献と社会」研究会が主催するジャウィ文献講読講習会に講師として参加した。そのための教科書として『ジャウィを学ぶ：ジャウィ文献購読テキスト（CIAS Discussion Paper No.27）』を編集、出版した。2012年9月のマレーシア出張の際には、政府系機関の言語出版局（DBP）で行われたジャウィのローマ字翻字に関するセミナーに参加してDBPの担当者やマレーシア人研究者と会合し、マレーシアにおけるジャウィの教材作成に関して協力することを確認した。

また、マレーシア（マレーシア国立公文書館）、シンガポール（シンガポール国立図書館、国立シンガポール大学図書館）、イギリス（大英図書館、イギリス国立公文書館）において各機関所蔵のジャウィ定期刊行物の調査を行った。

5) 研究活動スタート支援

(1) 「隋唐洛陽城の水環境からみた穀倉と漕運の発展について」

[研究代表者：宇都宮美生]（2012年度採用、2ヶ年間・初年度）

[目的]

本研究の目的は隋唐洛陽城における漕運と穀倉の発展を、文献学、考古学、歴史地理学、環境学的、数学的見地からさまざまな考察と分析を行い、従来の経済史あるいは交通史からの研究では解明できなかった課題を、都城史における水環境から研究することにある。古代の漕運はすでに中国全体の水運ルートが漠然と捉えられ、輸送の理論が確立されているが、本研究では具体的に揚州から開封を経山して洛陽へ向かう旧運河をすべて復元し、洛陽城内での構造、穀倉へのルートと形態、機能および役割を時系列で解明する。運搬された食糧を保管する穀倉については洛陽城内の含嘉倉の構造と運営のみが研究されているが、本研究では未解明の他の3倉もあわせ、洛陽城の穀倉の役割分担と相互関係について明らかにし、それを踏まえて漕運の具体的な水路と利用、洛陽城を支えた経済的要因を解明する。

[研究実施概要]

2年間の研究課題の初年度では穀倉というテーマで、都城における穀倉の役割と地形的な自然条件との関係を明らかにするために、現地調査とそれを考察、分析および発表するための技術的な方法の習得に努めた。まず、先行研究として、新たな論文および発掘調査報告書を入手した。情報収集としては中国水利史研究会に参加し、研究者との交流および水利史研究の情報を得

た。東アジア都城史研究会の国際会議に通訳として参加し、中国人研究者2名の講演の通訳と報告の翻訳を通じて、都城の構造と水利との関係について専門的かつ新しい見識を深め、日本史、中国史および朝鮮史における都城史の研究者との交流及び情報収集をすることができた。(http://www.toa-tojo.com/modules/bulletin/index.php?page=article&storyid=22)。同研究会の主催で、京都、奈良、大阪の都城、発掘現場および歴史博物館の訪問と見学ツアーに参加し、考古学を中心とした専門家の意見や助言を得るだけでなく、日本の古代都城の構造と位置を地形的に考察し、日本と中国の都城の比較をすることができた。次に、実地調査については洛陽のフィールドワークを2回行い、四倉の所在地に外向き踏査した。位置と地形、周辺の河道あるいは水道の有無と距離、遺構の確認を行い、収集した発掘調査報告書などと照合した。現地情報を得るだけでなく、河道と穀倉の位置の関係およびその地形的立地を考察した。技術面では、実地調査を考察し分析する方法として、都城や歴史GISの応用に関する書籍、古代の地図、CORONA衛星写真等入手し、さらにArcGISのソフトの基礎と応用については授業や講習会などに多く参加し、その操作方法を習得し、今後の成果報告に役立てる準備が整った。研究の成果を図表で表現した。

G. 東洋文庫研究員・研究課題一覧

研究員名	研究課題
會谷 佳光	和刻本を中心とした仏典の書誌学的研究
相原 佳之	中国明清時代環境史
青木 敦	宋代の法と経済
青山 瑠妙	現代中国政治・外交の研究
秋葉 淳	オスマン帝国末期の社会および制度
浅田 進史	独中関係史
浅野 秀剛	日本版画美術の研究
天児 慧	現代中国の政治体制及び国際関係
新井 政美	トルコ近代史
荒川 正晴	中央アジア古代史
飯尾 秀幸	中国古代国家史
飯島 明子	東南アジア大陸部北部の歴史
飯島 武次	殷周時代の考古学研究

研究員名

飯島 渉
 池田 温
 池田美佐子
 池田 雄一
 石川 寛
 石塚 晴通
 石橋 崇雄
 磯貝 健一
 市古 宙三
 井上 和枝
 井上 和人
 今西祐一郎
 彌永 信美
 上野 英二
 内田 知行
 内山 雅生
 梅田 博之
 梅原 郁
 梅村 坦
 宇山 智彦
 江川ひかり
 遠藤 光暁
 大江 孝男
 大河原知樹
 大澤 肇
 大澤 正昭
 太田 信宏
 太田 幸男
 大谷 俊太
 岡崎 礼奈
 岡田 英弘
 尾形 洋一
 岡野 誠

研究課題

医療社会史
 中国中古史、前近代東亜文化交流史
 エジプト近現代史
 中国古代社会史
 南アジア史
 日本語の歴史的研究、古代漢字文献学
 清朝政治史
 イスラーム期中央アジア古文書研究
 太平天国及び中国共産党の研究
 朝鮮時代郷村社会史研究・朝鮮女性史研究
 東アジア古代都城制度の比較研究
 源氏物語を中心とした平安時代文学の研究

 平安朝文学の研究
 中華民国社会史
 近代中国華北農村経済史
 現代朝鮮語の記述的研究
 宋元時代の法制制度の研究
 ウイグル民族誌、内陸アジア史
 中央アジア近代史・現代政治
 トルコ社会経済史
 中国語音韻史・方言学
 現代朝鮮語及び中期朝鮮語の研究
 19-20世紀シリアの社会史・政治史
 近現代中国における学校教育史
 唐宋時代社会史
 南インド近世史
 秦墓竹簡の研究
 室町・江戸時代文学の研究
 日本近代美術史
 アジア史

 前近代中国の王権・国家・法／敦煌吐魯番文献

研究員名

丘山 新
小川 裕充
奥村 哲
尾崎 文昭
小田 壽典
小名 康之
梶谷 懐
粕谷 元
糟谷 憲一
片桐 一男
片山 章雄
片山 剛
加藤 直人
加藤 弘之
金子 修一
金丸 裕一
辛島 昇
川井 伸一
川合 安
川崎 信定
川島 真
菊池 英夫
貴志 俊彦
岸本 美緒
北川 香子
北村 文夫
北本 朝展
金 鳳珍
草野 靖
楠木 賢道
久保 亨
窪添 慶文
久保田 淳

研究課題

中国仏教資料研究
中国絵画資料研究
中国近現代史
20-21 世紀中国の文学
古トルコ語仏教文献の研究
インド・ムガル時代史
中国の財政金融改革
トルコ現代史
18-19 世紀朝鮮政治史
日蘭文化交渉史の研究
中央アジア古代史
広東農村社会史研究
清朝の民族統治政策・清代档案史料の研究
地域開発の現状と政策に関する実証研究
中国古代史
中国政治経済史・日中関係史
南アジア史
中国企業研究
六朝貴族制の研究
チベット仏教の研究
近代中国外交史
唐宋時代の行政および法制の研究
東アジアの通信メディアをめぐる比較史的研究
明清時代地方社会史
カンボジア史
現代中東問題の研究
デジタル・アーカイブ
東アジアの歴史・思想・国際関係
中国王朝国家の発展と社会経済
清初の「民族」関係
中国近現代史
魏晉南北朝時代史
日本中世文学、和歌文学

研究員名

熊本 裕
 黒田 卓
 氣賀澤保規
 巖 善平
 黄 東蘭
 高野 太輔
 興梠 一郎
 小嶋 芳孝
 小杉 泰
 後藤 明
 小浜 正子
 小松 久男
 小南 一郎
 近藤 信彰
 齋藤真麻理
 早乙女雅博
 酒井 憲二
 櫻井 徹
 桜井由躬雄
 佐藤健太郎
 佐藤 慎一
 佐藤 宏
 佐藤 仁史
 澤江 史子
 塩沢 裕仁
 設楽 國廣
 薮 勇造
 篠崎 陽子
 斯波 義信
 嶋尾 稔
 清水 宏祐
 清水 信行
 志茂 碩敏

研究課題

イラン語史の研究
 近現代イラン史
 中国隋唐政治社会史
 中国の三農問題
 近代日中関係史
 初期イスラーム史
 現代中国論・中国現代史
 渤海文化の考古学的研究
 現代イスラム政治の研究
 イスラム社会と政治の研究
 中国ジェンダー史
 中央アジア近代史
 中国藝能史研究
 イラン史・ペルシア語文化圏史
 中世日本文学の研究
 東アジア考古学の研究
 日本語の史的研究
 在留外国人のコミュニケーション誌の現況について
 ベトナム史
 マグリブ・アンダルス史
 中国近代政治資料研究
 農村経済社会の長期変動
 近現代江南農村社会史研究
 現代トルコ政治
 中国古代歴史地理研究
 オスマン帝国末期政治史
 南アラビア古代史
 前近代中国文化史
 中国社会経済史
 ベトナム史
 セルジューク朝時代イランの研究
 古代の日本・大陸交流史
 13・4世紀モンゴル政権中枢・中核の研究

研究員名

庄垣内正弘
城山 智子
真道 洋子
新免 康
未成 道男
須川 英徳
杉山 清彦
鈴木 恵美
鈴木 均
鈴木 博之
鈴木 立子
砂山 幸雄
西洋 太郎
妹尾 達彦
關尾 史郎
関本 照夫
曾田 三郎
高田 幸男
高遠 拓児
高橋 英海
瀧下 彩子
武内 紹人
武内 房司
武田 幸男
田島 俊雄
多田 狷介
立川 武蔵
田中 明彦
田中 一成
田中 時彦
田中 仁
田中比呂志
C. A. ダニエルス

研究課題

チュルク語の研究
近現代中国の通貨・金融システム
イスラーム・ガラス文化史
中央アジア史
東アジア社会人類学
高麗・朝鮮時代の商業

現代エジプト政治史
イランおよびアフガニスタンの地域研究
徽州民間祭祀の研究
元朝社会経済史
現代中国思想・文化・政治体制
テスト
中国古代・中世都市史
敦煌・トルファン文書研究
東南アジア伝統工芸業の研究
中国近代政治・社会史
長江下流域の地域社会・エリート・教育団体
清代における刑罰制度の研究

近現代中国社会文化史
古代チベット語の歴史言語学的研究

朝鮮古代・近世史
中国農業・農家の経済計算と所得分配
漢魏晋史
チベット密教教理の研究
現代東アジア国際政治の研究
中国演劇史
日本の政治的近代化の研究
中国近代政治史 - 初期中国共産党史
近現代中国の社会統合の研究
清代社会経済史、中国技術史

研究員名

田村 晃一
 竺沙 雅章
 千葉 熨
 辻本 裕成
 土田 哲夫
 坪井 祐司
 鶴見 尚弘
 寺田 浩明
 唐 成
 唐 亮
 徳原 靖浩
 戸倉 英美
 朽尾 武
 土肥 義和
 富澤 芳亜
 鳥海 靖
 中兼和津次
 長沢 栄治
 永田 雄三
 中谷 英明
 永積 洋子
 長縄 宣博
 中見 立夫
 中村 元哉
 新村 容子
 西 英昭
 西尾 寛治
 西田 龍雄
 延廣 眞治
 萩田 博
 長谷川誠夫
 八尾師 誠
 服部 龍二

研究課題

東北アジアの考古学研究
 中国仏教文化史
 宋代宮廷史
 中古・中世日本文学の研究
 中国近現代史、国際関係史
 マレーシア近代史
 明・清時代社会経済史
 中国明清法制史
 現代中国金融の研究
 現代中国政治史の研究
 ペルシア文学、イラン思想史
 中国古典文学資料研究
 和漢比較文学の研究及び日本に伝来した漢籍の研究
 西域出土漢文文書の研究
 中国近代経済史
 日本近現代史
 現代中国経済・移行経済の研究
 近代エジプト社会経済史
 オスマン帝国社会経済史
 インド仏教学
 日本近世対外交渉史
 帝政ロシアのムスリム社会と国家
 清代モンゴル史・清代文書の史料的研究
 中国近代政治史-憲政史・メディア史
 中国・台湾の近現代法制史
 マレーシア・インドネシア近世史
 チベット・ビルマ語派の研究
 江戸・明治の文芸
 ウルドゥー語学・文学の研究
 宋代官僚制の研究
 20世紀初頭のイランにおける立憲革命の研究
 東アジア国際政治史

研究員名

花田 宇秋
濱下 武志
濱島 敦俊
濱田 正美
濱本 真実
林 佳世子
林 俊雄
原 實
原山 隆広
平勢 隆郎
平野健一郎
平野 聡
弘末 雅士
廣瀬 紳一
深沢 眞二
藤井 昇三
藤田 忠
藤本 幸夫
古田 和子
古屋 昭弘
弁納 才一
寶劔 久俊
星 泉
細谷 良夫
堀川 徹
本庄比佐子
牧野 元紀
松井 太
松重 充浩
松永 泰行
松濤 誠達
松丸 道雄
松村 潤

研究課題

正統カリフ・ウマイヤ朝史
中国近現代史
中国近世社会経済史
中央アジアにおけるイスラーム研究
ロシア・ムスリム史
オスマン朝期中東社会史
中央ユーラシア史・草原考古学の研究
インド古代文学の研究
アッバース朝末期政治史
中国考古資料研究
近代東アジア国際関係論
中国党支配(国民党・共産党)の史的研究
インドネシア宗教社会史
漢字文化圏電子情報学の研究
連歌・俳諧の研究
現代日中関係史の研究
中国古代政治・社会史
朝鮮本研究
情報・流通ネットワークの歴史的分析
中国語史
近現代中国農村経済史
現代中国の農村社会経済変動の研究
清朝政治史
中央アジア文書研究
近現代日中関係史
ベトナムのキリスト教
中央アジア出土ウイグル語・モンゴル語文献の研究
近現代中国政治・社会史及び東北アジア地域史
現代イランの政治・宗教及びシーア派研究
インド古代神話学の研究
殷周金文の研究
東北アジア民族史

研究員名

松本 弘
 丸川 知雄
 三浦 徹
 水野 善文
 三田 昌彦
 御牧 克己
 宮崎 修多
 宮脇 淳子
 村井 章介
 村上 衛
 村田雄二郎
 毛里 和子
 本野 英一
 初山 明
 守川 知子
 森平 雅彦
 森本 公誠
 森安 孝夫
 矢島 洋一
 柳澤 明
 柳田 征司
 柳谷あゆみ
 矢吹 晋
 山内 弘一
 山内 民博
 山口 瑞鳳
 山村 義照
 山本 英史
 山本 毅雄
 湯浅 剛
 吉澤誠一郎
 吉田 伸之
 吉田 光男

研究課題

イエメン地域研究、エジプト近代史、現代中東政治
 中国の産業集積および日中経済関係
 イスラム都市社会史
 古典サンスクリット文学と中世ヒンディー文学
 北インド中世史
 チベット宗義書の研究
 近世近代漢詩文の研究

 日本中世を中心とする東アジア文化交流史
 清末沿海経済史の研究
 中国近代史、中国地域研究
 現代中国政治・外交及び東アジア国際関係
 清末民初における対外経済関係
 中国古代法制史・辺境論・資料論
 イラン・イスラーム史
 朝鮮中世・近世史

 古代ウイグル文書の研究、中央ユーラシア古代中世史
 中央アジア史
 清代外交史・民族関係史
 日本語の歴史的研究
 中世アラブ政治史、イスラーム地域資料研究
 近現代中国経済
 李朝史、朝鮮儒教研究
 朝鮮後期郷村社会史研究
 チベット学、仏教哲学
 日本近現代史
 17～19世紀中国社会構造の研究
 東洋学研究資料のデジタル・アーカイブ化
 中央アジア政治史
 中国近現代史
 日本近世都市社会史
 朝鮮近世史

研究員名

吉田 豊
吉水千鶴子
吉村慎太郎
六反田 豊
和田 恭幸
渡辺 紘良

研究課題

ソグド語及びソグド語文献の研究
インド・チベット仏教思想史の研究
イラン近現代史
朝鮮中世・近世史
日本近世出版文化史および通俗仏書の研究
宋代社会史

(全 250 人)

2. 研究資料出版

総合アジア圏域研究との連携の下に、超域アジア研究と歴史・文化研究に関する一次資料の解析と研究を実施し、その成果は、継続してきた和文および欧文の紀要・雑誌・叢書として刊行し、順次オンライン公開を進める。さらに今回、総合アジア圏域研究に伴う成果を新たにアジア研究に関する英文の電子ジャーナルとして編集発行する。これらの出版物ならびに電子ジャーナルは、日本・アジア・欧米を結ぶアジア研究の国際交流をさらに促進するものとなる。

A. 定期出版物刊行

- (1) 『東洋文庫和文紀要』（東洋学報）第 94 巻第 1～4 号 A5 判 4 冊
(刊行済)
- (2) 『東洋文庫欧文紀要』（*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*）
No.70 B5 判 1 冊 (刊行済)
- (3) 『近代中国研究彙報』第 35 号 A5 判 1 冊 (刊行済)
- (4) 『東洋文庫書報』第 44 号 A5 判 1 冊 (刊行済)
- (5) 『新たなアジア研究にむけて（超域アジア研究報告）』第 9 号
B5 判 1 冊 (刊行済)
- (6) *Asian Research Trends New Series* No.7 A5 判 1 冊 (刊行済)
- (7) *Modern Asian Studies Review* Vol.5 A5 判 1 冊 (刊行済)

B. 論叢等出版

- (1) *Studies in Tibetan Buddhist Texts* vol.1
(シャン・タンサクパ『中観明句論註釈』1) B5判 1冊 (刊行済)
- (2) *The 1946 Republic of Kurdistan: A Research on the Struggle for Independence And Its Historical Significance* (英語/クルド語)
B5判 1冊 (刊行済)
- (3) 『岩崎貴重書書誌解題 VII』 B5判 1冊 (刊行済)
- (4) 『修訂版 敦煌・吐魯蕃出土漢文文書の新研究』
(汲古書院と共同出版) B5判 1冊 (刊行済)
- (5) 『内国史院檔 天聰5年II』 B5判 1冊 (刊行済)

C. 研究資料の全文オンライン公開

以下の研究部ホームページにおいて、順次研究資料の全文公開を行った。
http://www.toyo-bunko.or.jp/newresearch/publication_new.php

3. 研究情報普及

A. 講演会

(1) 東洋学講座

(春期) 共通テーマ「東洋文庫ミュージアムオープン記念講演会
〈東洋文庫と本の世界〉」

第529回 2012年6月11日(月)

「オランダ語・日蘭関係史料による19世紀の古気候再現
—東洋文庫に収蔵されるシーボルト史料を発端として—」
神戸大学大学院教授 塚原 東吾 氏

第 530 回 2012 年 6 月 20 日 (水)

「チベットの文字の文化史」東洋文庫研究員

神戸市外国語大学客員研究員

岩尾 一史 氏

第 531 回 2012 年 6 月 29 日 (金)

「エジプトにおける民主主義の系譜と議会文書」

東洋文庫研究員

名古屋商科大学教授 池田美佐子 氏

(秋期) 共通テーマ「東洋文庫と本の世界Ⅱ」

第 532 回 2012 年 11 月 19 日 (月)

「判ると楽しい“大清帝国”文献史料」

東洋文庫研究員

国土舘大学教授

石橋 崇雄 氏

第 533 回 2012 年 11 月 30 日 (金)

「モリソンパンフレットの世界」

京都府立大学准教授 岡本 隆司 氏

第 534 回 2012 年 12 月 3 日 (月)

「中国の族譜と同族結合の実態」

東洋文庫図書部長 田仲 一成 氏

(2) 特別講演会

2012 年 6 月 16 日 (土)

「エジプトにおけるクフルとその容器」

東洋文庫研究員

真道 洋子 氏

“Beauty and Cosmetics in Ancient Egypt”〔英語・通訳なし〕

ヘルワン大学教授 Gihane Zaki 氏

2012年7月10日（火）

“Women’s Sufi Community in a Country in Turpan, Xinjiang”

〔英語・通訳なし〕

新疆大学教授 ラヒラ・ダウト 氏

2012年7月20日（金）

「国図敦煌特蔵中の《大般若経》: 中国国家図書館・敦煌特蔵中の《大般若経》」

〔中国語・通訳あり〕

上海師範大学教授 方 広錫 氏

2012年9月28日（金）

“(Re-)Making the History of Soviet Islam:

Some Emergency Tasks and Perspectives” 〔英語・通訳なし〕

フランス国立科学研究センター CNRS 研究員

Stéphane Dudoignon 氏

2012年11月10日（土）

“Myth and Ritual: the case of Islamized Shamanism in Xinjiang”

〔英語・通訳なし〕

フランス国立科学研究センター・上席研究員（研究ディレクター）

Thierry ZARCONE 氏

2012年11月20日（火）

「フェルガナ盆地に保存されるカーディー文書の研究史について」

〔ロシア語・通訳あり〕

ウズベキスタン共和国フェルガナ州立郷土博物館長

ハバードウル・J・ハシモフ 氏

「ザキ・ヴァリディ・トガン：亡命期前半の生活と著作（1923～1948年）」

〔ロシア語・通訳あり〕

ロシア科学アカデミー・ウファ学術センター歴史言語文学研究所

バシコルトスタン歴史・文化史部主任

マルスイリ・N・ファルフシャートフ 氏

2012年12月10日(月)

“Imperial Thinking” and the New Qing History”〔英語・通訳なし〕

Harvard University, East Asian Languages and Civilizations

Mark C. Elliott 氏

2013年3月23日(土)

「中国陳情の研究—社会深層からの視点」〔英語・通訳あり〕

於：早稲田大学現代中国研究所

中国外交学院教授 李 紅勃 氏

2013年3月27日(水)

“Scholarly Publishing in English: What Editors Expect”〔英語・通訳なし〕

Publishing Director, National University of Singapore Press

Paul Kratoska 氏

(3) 東洋文庫談話会

2013年2月19日(火)

「バートゥルたちの「近代」——クルグズ遊牧社会とロシア帝国——」

日本学術振興会特別研究員 (PD)

秋山 徹 氏

2013年3月7日(木)

「20世紀初頭におけるチベットの領域問題の形成」

日本学術振興会特別研究員 (PD)

小林 亮介 氏

2013年3月25日(月)

「日中戦争期の上海経済と企業経営」

日本学術振興会特別研究員 (PD)

今井 就稔 氏

(4) 公開講座

2012年4月14日(土)

- 《東インド会社とアジアの海賊展記念シンポジウム》 於：日仏会館
 「アジアの人々と東インド会社という海賊」
 東京大学東洋文化研究所教授 羽田 正 氏
 「カワーシム海賊とは誰か?—現実と想像力との混交—」
 日本学術振興会特別研究員 鈴木 英明 氏
 「貿易、戦争、移民：18世紀マレー海域と東インド会社」
 広島大学大学院文学研究科准教授 太田 淳 氏
 「東南アジアの海域秩序と海賊」
 東洋文庫研究員 弘末 雅士 氏
 「海賊から商人へ—倭寇とオランダ東インド会社—」
 東京大学史料編纂所准教授 松方 冬子 氏
 「“中国海賊(チャイニーズ・パイレーツ)”イメージの形成」
 日本学術振興会特別研究員 豊岡 康史 氏
 「清朝に“雇われた”イギリス海軍」
 東洋文庫研究員 村上 衛 氏
 「中国沿海の商業と海賊行為 1620 - 1640」
 フランス極東学院研究員 Paola Calanca 氏

2012年5月19日(日)

- 「屏風に描かれたオランダ東インド会社の活動」
 長崎歴史文化博物館研究員 深瀬公一郎 氏

2012年8月18日(日)

- 《ア!教科書で見たゾ展記念シンポジウム》
 「世界史は、ファンタジーワールドの物語か?!」
 文京学院大学女子高等学校教諭 小川 宏明 氏
 「世界史教科書、図表のキャプションまで読み込め!」
 東京都立国分寺高等学校主任教諭 風間 睦子 氏
 「エ!これ見てないゾ?!世界史教科書の悩ましい図版選び」
 東洋文庫研究員 岸本 美緒 氏
 「東南アジアと日本を「つなぐ」「くらべる」~新しい世界史の威力と魅力~」
 大阪大学教授 桃木 至朗 氏

2012年8月26日(月)

「東洋史の中の「東洋」一日中両国の東洋史教科書を通して」

東洋文庫研究員

黄 東蘭 氏

2012年8月29日(金)・30日(土)・31日(日)

《東洋文庫アジア資料学研究シリーズ》

「東洋のCodicology - 文理融合型東洋写本・版本学(講習会)

- 漢字文献を中心として」

東洋文庫研究員

石塚 晴通 氏

東洋文庫研究員

土肥 義和 氏

2013年1月26日(土)

《もっと北の国から展記念講演》

“幕末日露関係史の最前線：もっと北の国から日本への熱き視線”

「19世紀初頭の日本・ロシア・カラフト：

ロシア所在日本関係史料の調査と研究」

東京大学史料編纂所副所長

保谷 徹 氏

「ロシア人の観た幕末日本：

プチャーチンの来航とゴンチャロフ『日本渡航記』

埼玉大学教養学部教授

澤田 和彦 氏

2013年1月27日(日)

《もっと北の国から展記念講演》

“もっと知ろう、もっと北の国Ⅰ：帝政ロシアの実像”

「北海道大学スラブ研究センター、人間文化研究機構プログラム

イスラーム地域研究・現代中国地域研究 東洋文庫拠点共催、
学習院大学史料館後援」

「ナポレオンのモスクワ遠征とロシア・イメージの変容」

北海道大学スラブ研究センター助教

越野 剛 氏

「総督制を通じたロシア帝国の統合：

西における民族操作、東における空間操作」

北海道大学スラブ研究センター教授

松里 公孝 氏

2013年2月10日（日）

《もっと北の国から展記念講演》

“もっと北の国の音楽：魅惑のバラライカ” [東京芸術大学共催]

「バラライカはロシアの伝統楽器か？」

宮城教育大学名誉教授

森田 稔 氏

「ロシアの民族音楽とバラライカの魅力」（レクチャーと演奏）

東京芸術大学音楽研究センター教育研究助手

マキシム・クリコフ 氏

2013年2月16日（土）

《もっと北の国から展記念講演》

“もっと知ろう、もっと北の国Ⅱ：中央アジアからのまなざし”

[北海道大学スラブ研究センター、人間文化研究機構プログラム

イスラーム地域研究・現代中国地域研究 東洋文庫拠点共催、

学習院大学史料館後援]

「中央アジアと東西の帝国：ロシアからの視線と中国からの視線」

早稲田大学イスラーム地域研究機構次席研究員

野田 仁 氏

「中央アジアから「北の国」へのまなざし：

近代知識人のロシア観を手がかりに」

北海道大学スラブ研究センター教授

宇山 智彦 氏

2013年2月17日（日）

《もっと北の国から展記念講演》

“もっと知ろう、もっと北の国Ⅲ：北海道とサハリン”

[北海道大学スラブ研究センター、人間文化研究機構プログラム

イスラーム地域研究・現代中国地域研究 東洋文庫拠点共催、

学習院大学史料館後援]

「19世紀のアイヌ社会と蝦夷地・北海道」

北海道大学大学院文学研究科・文学部准教授

谷本 晃久 氏

「19世紀のサハリン」

北海道大学スラブ研究センター准教授

梶内勇津流 氏

2013年2月23日(土)

《もっと北の国から展記念講演》

“ロシアの正教、正教のロシア：

頭でロシアはわからない、心で親しむ歴史と文化”

「正教会における祈り：チェルノブイリとイコン」

清泉女子大学文学部専任講師 井上まどか 氏

「古儀式派とロシア政治：日露戦争からソ連崩壊まで」

法政大学法学部教授 下斗米伸夫 氏

「ロシア文学における正教と異端派」

東京外国語大学学長 亀山 郁夫 氏

2013年2月24日(日)

《もっと北の国から展記念講演》

“もっと知ろう、もっと北の国Ⅳ：せめぎ合う二つの大国”

〔北海道大学スラブ研究センター、人間文化研究機構プログラム

イスラーム地域研究・現代中国地域研究 東洋文庫拠点共催、
学習院大学史料館後援〕

「北京からサンクト・ペテルブルクへ：清朝の遣ロシア使節をめぐって」

早稲田大学文学学術院教授 柳澤 明 氏

「ロシアと中国：境界問題の歴史と現在」

北海道大学スラブ研究センター教授 岩下 明裕 氏

2013年3月2日(土)・3日(日)

《総合アジア圏域研究国際シンポジウム》(使用言語:英語)

[イスラーム地域研究東京大学拠点共催]

Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks:

Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere
SESSION 1:

The Multi-dimensional Character of Central Asian Cultures as Seen
from the Variety of the Scripts and Languages of Excavated Texts

Coordinator: UMEMURA Hiroshi

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Chuo University)

Speakers, Titles:

DOHI Yoshikazu (Research Fellow, Toyo Bunko)

“The Dynamism Inherent in Han Chinese Personal Names as
Shown in Index of Chinese Surnames Appearing in the Dunhuang
Chinese Documents Dating from the Late 8th to the Early 11th
Century”

Peter ZIEME

(Professor, Institute of Turcology, Free University, Berlin)

“Personal Names of Central Asian Christians: Focusing on Old
Uighur Manuscripts”

TAKEUCHI Tsuguhito

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Kobe City University of
Foreign Studies)

“Various Ethnic Groups with Tibetan Personal Names in the 9th-
12th c. Texts and Inscriptions”

NICHOLAS SIMS-WILLIAMS (Professor, SOAS, London University)

“Personal Names in Bactrian Sources and Their Varied Ethnic
Origins”

Commentators:

YOSHIDA Yutaka

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Kyoto University)

MATSUI Dai

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Hirosaki University)

SESSION 2:

The Regional Image of Central Asia as Portrayed in 18th-20th Century
Historiography: Central Asian, Chinese and Russian Perspectives

Coordinator: SHINMEN Yasushi

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Chuo University)

Speakers, Titles:

ONUMA Takahiro (Associate Professor, Tohoku Gakuin University)

“The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors”

OBIYA Chika

(Associate Professor, Center for Integrated Area Studies, Kyoto
University)

“Imperial Russia's Eyes on Central Asia: Turkestanskii Sbornik as
a Set of Colonial Knowledge”

Ablet KAMALOV

(Chief Research Associate, Institute of Oriental Studies named
after R.B. Suleimenov under the Ministry of Education and Science
of Republic of Kazakhstan, Almaty)

“Xinjiang in the Focus of Uyghur Studies in Soviet Central Asia”

Commentator:

NAKAMI Tatsuo

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Research Institute for
Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of
Foreign Studies)

SESSION 3:

The Revival of Islam in Central Asia: Links with West and South Asia

Coordinator: KOMATSU Hisao

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Tokyo University of
Foreign Studies)

Speakers, Titles:

Stephane DUDOIGNON

(Senior Research Fellow, Centre National de la Recherche
Scientifique, Paris)

“Interactions between the Near and Middle East, Central and
Inner Asia in the Muslim Religious Field”

Bayram BALCI

(Visiting Scholar at Carnegie Endowment for International Peace, Washington DC)

“The Jama’at al Tabligh in Kirghizstan and Kazakhstan and Its Contribution to the Recreation of Islamic Relations between Central Asia and Indian Subcontinent”

YAMANE So (Professor, Osaka University)

“Think Umma, Use the Modern-Networks of Modern Muslim Intellectuals in South Asia, 1900-1930”

Commentator:

UYAMA Tomohiko

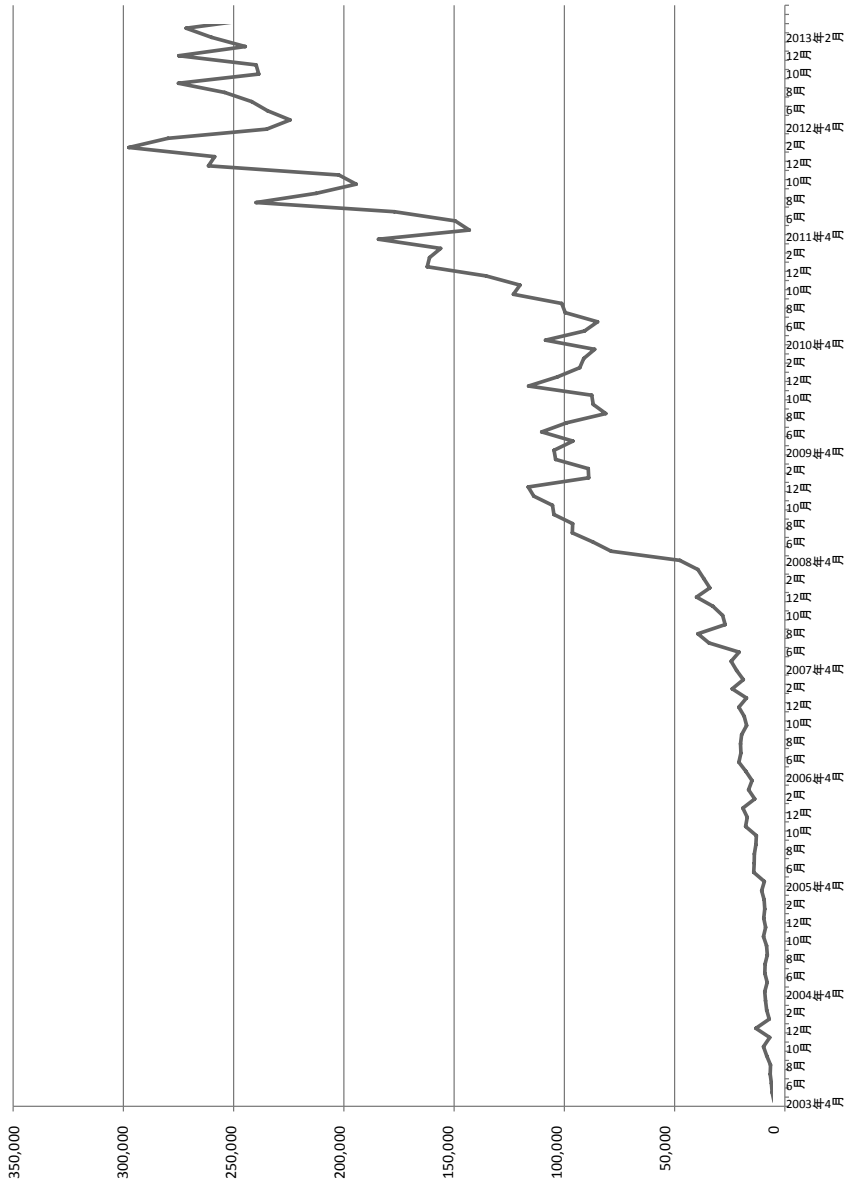
(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Slavic Research Center, Hokkaido University)

(5) 各種研究会・講演会開催

数量／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
研究会数	7	13	18	14	11	14	13	15	13	3	6	11	137
参加人数	60	147	295	175	141	192	272	323	189	23	114	254	2,185

B. データベース公開

2012年4月1日～2013年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ（日本語・英語）に対するオンライン検索アクセス状況については、【図1】（P.XX）【図2】（P.XX）のとおりである。



【图 1】

C. 研究者の交流および便宜供与のサービス

〈長期受入〉

(1) 外来研究員の受入

彌永 信美（フランス国立極東学院 東京支部長）

「日本仏教」 (2012年9月1日～2013年8月31日、延長予定)

GIRARD Frédéric（フランス国立極東学院教授）

「日本仏教」 (2012年9月21日～2013年9月20日、極東学院)

宋 好 彬（高麗大学校民族文化研究院研究員）

「朝鮮本古典籍の調査」

(2012年9月1日～2013年8月31日、高麗大学校)

[受入担当：藤本幸夫]

ZIEME Peter（元ベルリン トルファン研究所所長）

「古ウイグル文献学」 (2012年9月1日～2013年8月31日、私費)

[受入担当：梅村 坦]

呉 真（南開大学副教授）

「日中祭祀演劇の比較について」 (2013年1月12日～2月6日、私費)

[受入担当：田仲一成]

(2) 2012年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

小林 亮介（筑波大学大学院PD）

「20世紀前半における「チベットの領域」問題の形成

一東チベットを中心に」

(2010年度採用、11・12年度・3ヵ年間)

[受入指導者・新免 康]

池尻 陽子（筑波大学大学院 PD）

「チベット仏教僧の思想とネットワークが清代内陸アジア史に与えた影響に関する研究」

（2010 年度採用、11・12 年度・3 ヶ年間）

[受入指導者・吉水千鶴子]

秋山 徹（日本学術振興会特別研究員 PD）

「近代中央アジアにおける地域秩序の再編過程：

クルグズ部族首領層の動向を中心に」

（2010 年度採用、11・12 年度・3 ヶ年間）

[受入指導者・小松久男]

村上 正和（東京大学大学院 PD）

「清代中国社会と演劇文化」

（2011 年度採用、12・13 年度・3 ヶ年間）

[受入指導者・山本英史]

亀谷 学（北海道大学大学院 PD）

「パピルス文書による初期イスラーム時代統治システムの研究」

（2011 年度採用、12・13 年度・3 ヶ年間）

[受入指導者・後藤 明]

小林 隆道（早稲田大学大学院 PD）

「10-13 世紀中国における統治と「文書」

—官文書分析による史料批判学の再構築—」

（2011 年度採用、12・13 年度・3 ヶ年間）

[受入指導者・岸本美緒]

今井 就稔（一橋大学大学院 PD）

「日中戦争期中国資本家の研究—経済構造の変容と対日関係の模索—」

（2011 年度採用、12・13 年度・3 ヶ年間）

[受入指導者・久保 亨]

熊倉 和歌子（お茶の水女子大学大学院 PD）

「14-16 世紀エジプトにおける徴税と村落社会：土地台帳をてがかりに」

（2012 年度採用、13・14 年度・3 ヶ年間）

[受入指導者・林佳世子]

小林 晃（北海道大学大学院 PD）

「12～15 世紀中国における華北・江南の政治的統合過程」

（2012 年度採用、13・14 年度・3 ヶ年間）

[受入指導者・山本英史]

〈外国人研究者への便宜供与〉

China

張永江 [中国人民大学教授]（ほか 29 名）

France

DUDOIGNON Stephane [Centre National de la Recherche Scientifique]

Germany

ZIEME Peter

Iran

Reza Nazarahari ambassador（ほか 2 名）

Kazakhstan

KAMALOV Ablet [Institute of Oriental Studies]

Korea

金賢貞

Mongol

DASHDAYAA [Ider University, Ulaanbaatar]（ほか 6 名）

Nederland

Leo M Douw [Universiteit van Amsterdam]

Russia

ファルフ・シャートフ [ロシア科学アカデミー]

Singapore

黄基明 [Institute of Southeast Asian Studies] (ほか3名)

Turkey

Rifat Bali [Libra Kitap]

UK

NICHOLAS Sims-Williams [London University]

USA

Virgina Shin [University of California] (ほか1名)

Uzbekistan

ハバードゥル・J・ハシモフ [フェルガナ州立郷土博物館長]